

北中山の歴史・伝承

(語り部教本)



平成 30 年 3 月

北中山まちづくり委員会
北中山語り部の会

頁	項	目
4	○弁財天山(落井)	
5	○水理碑(落井)	
7	○おいの川(松成)	
8	○松成の由来(松成)	
9	○神様のほうたい(川島)	
10	○神様の足跡(川島)	
11	○波うち岩(川島)	
12	○小山(川島)	
13	○「堂の講」田の神まつり(川島)	
14	○雨乞い(川島)	
15	○鼻高の面(川島)	
16	○ごんたろうばこ(川島)	
17	○お面様その1(川島)	
18	○お面様その2(川島)	
19	○お面様その3(川島)	
20	○おそうじこう(左義長)	
21	○天狗松(川島)	
22	○五重塔(川島)	
23	○川島城址(川島)	
25	○霊を迎え、霊を送る(川島)	

- 26 ○「新堂」は昔川島だった(川島)
- 27 ○河島左近蔵人維頼の子孫(川島)
- 28 ○蓮華寺(れんげじ)の伝説(川島)
- 29 ○竹細工(戸口)
- 30 ○「観音堂」の由緒(戸口)
- 31 ○「柿根寺」と「白山神社」の由緒(戸口)
- 32 ○石祠(観音堂境内の由緒) ○あじろがさ祭り (戸口)
- 33 ○火まつり(戸口)
- 35 ○村を守っている椿(戸口)
- 36 ○でんでら坊(戸口)
- 37 ○狼谷婆々磔刑岩(中戸口)
- 38 ○どうしよう畑(中戸口)
- 39 ○馬道(中戸口)
- 40 ○網代笠(中戸口)
- 42 ○いぼ落としの岩(上戸口)
- 43 ○乳の出る銀杏(上戸口)
- 45 ○盗まれた観音様(上戸口)
- 46 ○三峯寺(上戸口)
- 47 ○三峯村(上戸口)
- 48 ○三峯のくらし(上戸口)
- 50 ○三峯城(上戸口)

51 ○鉦傷御影と血の川(上戸口)

52 ○お堂と坂下氏子(上戸口)

53 ○刀那神社(上戸口)

55 ○こぬか虫送り(上戸口)

56 ○獅子岩(磯部)

58 ○赤橋の今昔(磯部)

59 ○れいぞうこ(磯部)

61 ○磯部のため池(磯部)

63 ○お山王さん(磯部)

64 ○石部神社の算額(磯部)

65 ○報徳記(磯部)

68 ○あとがき

○弁財天山 伝説 落井町

「帝釈堂(たいしゃくどう)」

弁財天山の頂上より少し北に下りたところに、一間四方位のお堂があります。このお堂は、もとは中野にあったそうですが、昔、所有権争いをして、落井の勝訴となって、ここに祭られてあるそうです。帝釈様が、左手に持っておられる、サワリンを鳴らされると、下界はたちまち泥海となるという言い伝えがあります。

「小塚」

忠霊塔参道の入口に、高さ二尺余りの小塚があります。昔、落井に庄太夫さんという家があったそうです。ある日一人の六部(ろくぶ)が、一夜の宿を求めて来たので、同情して泊めてあげましたが、六部はにわかに病気になり、間もなく死んでしまったそうです。後始末をしようと、所持品を調べると、驚いたことには大金が出て来て、庄太夫は大金持ちになってしまいました。そこで、庄太夫の家では、六部(ろくぶ)の墓を屋敷内に造って、その霊を厚く弔いましたが、後に現在の地へ移したと言いつたえられています。

「白椿」

この山で白椿を見つけた者は、その下から大金を得られると伝えられています。

六部(ろくぶ)とは、六十六部の法華経を六十六か所の霊地に納めるために白衣に手甲、脚絆姿で巡礼した僧のこと。



○水理碑 史実 落井町

鯖江市落井町の西のはずれの川沿いに石碑が一基ある。

今から三百年ほど前にあった水論（水争い）を記念（※記念：思いを残す）したものである。米作りを生業とする農民にとって、一番の問題は水である。時と場合で利害が相反するものだけに、至る所で不幸な争いが起きた。

享保十三年（1728）のことである。長年、水の便が悪くて困っていた落井の（松成・吉谷・四方谷）三集落が二つの計画を立て、落井へ申し入れてきた。一つは、河和田川の水を落井の集落の中心を縦貫する用水路の建設。もう一つは、落井、松成、川島の境界付近でせき止めて灌漑に供する案である。

河和田川、鞍谷川の合流点（ニタロ）近くに位置する、低い土地の落井にとって、到底、応じられる筈はなかった。松成、吉谷、四方谷の三集落は、落井が容易に聞き入れないので福井藩に許可願いを出した。

これにたいして、落井では村中がお寺に集まり、協議の結果、許可する方針に傾いた福井藩に必死の阻止陳情を行った。

境界を接する鯖江藩の川島とも利害が重なり、工事は一応、見合わせるということになり、落井の陳情は果たされたことになった。

しかし、五万石の鯖江の小藩に干渉されて、面目を失い、納まらないのは、福井藩である。その鬱憤（うっぷん）をはらすため、『落井は、福井藩でありながら、他藩と同腹して、福井藩の計画を阻害した』として、庄屋、長百姓、次役の三人を捕らえて投獄した。

獄中の三人は、連日拷問にかけられたが、いずれも屈せず、終始一貫申し立てを変えなかったという。

一方、庄屋、長百姓、次役のそれぞれの屋敷は、青竹の矢来を巡らされて外部との連絡を断った。

村人たちの奔走もむなしく、庄屋、六〇歳代は打ち首、財産没収。長百姓、五〇歳代は打ち首。次役、二〇歳代は四拾里外追放。家族は土地払いという厳罰となった。打ち首になった二人の命日、六月二十五日は『水のお講さま』と呼んで行われていたが、戦時中に途絶えた。時は、十代將軍吉宗の治世で、福井藩主は松平宗矩（おねのり）、鯖江藩主は間部詮方（あきみち）であった。

京都へ流された次役は、四十年後 松成、吉谷、四方谷の三集落から罪の願い下げの申請があり、帰宅を赦された。現在末裔の家には、別れを惜しむ公卿（※公卿：三位以上の身分の高い人）から手渡された恵心僧都（けしんそうず）の手による仏像と日常使っていた薬缶が残されている。三人合祀の墓は、落井の正立寺にある。

冒頭で述べた水理碑は、明治の終わり頃に、村人により建立されたものであるが、その後の水害による河川改修で四度、場所を移転した。これも多難の歩みを辿っている。

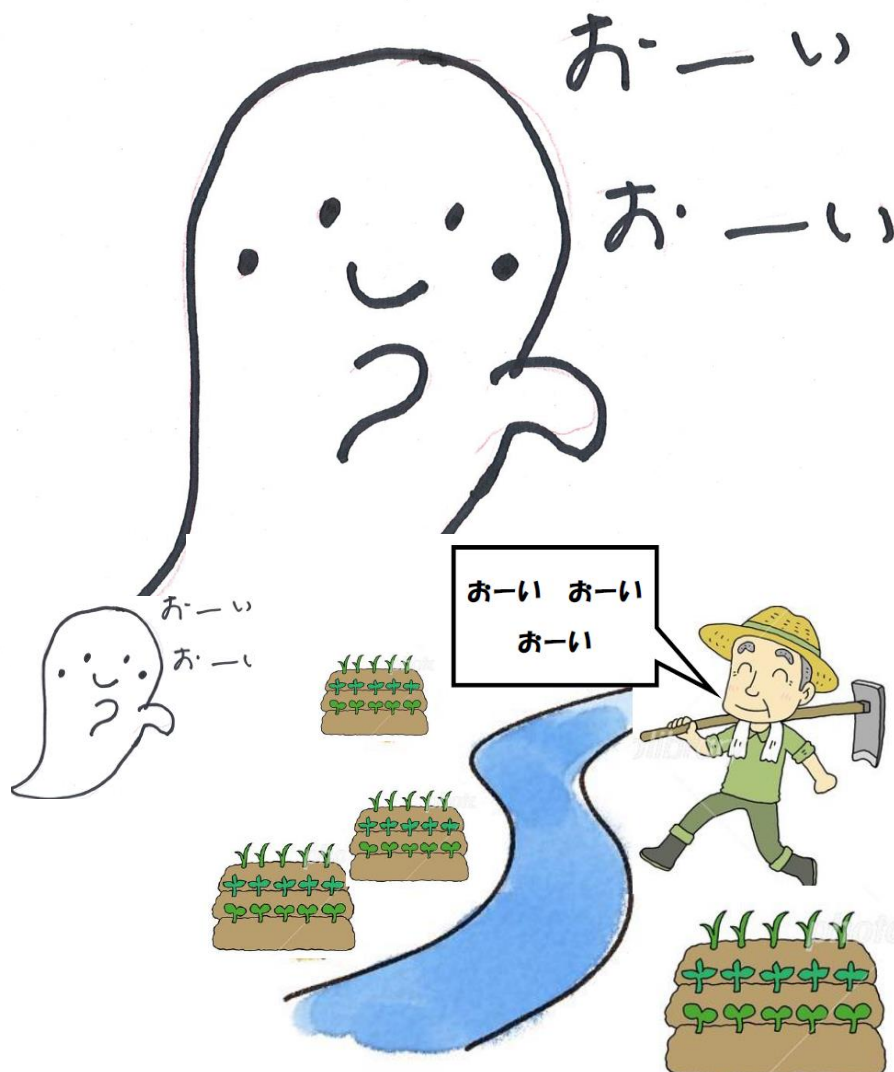
鯖江市史第1巻民俗編より



○おいの川 伝説 松成町

昔、落井の旧県道の南側に小川がありました。蓑輪やよんどんと言う「駄菓子屋」(元の相馬タクシー車庫)を経て、落井の中心部を下流に流れ、おいの川に流れ込んでいたそうです。此のおいの川は、松成、吉谷、四方谷の三ヶ村の水田を養う重要な小川で両岸には、雑草や茅、苔などが生い茂って、メダカ、小鮒、ドジョウ、蝸(にな)、小貝など沢山生息して小砂利で清々として綺麗な水が何時も20センチか30センチ位の深さで流れていたそうです。

おかし、昔のこと、川を堰止めた時の出来事だろうと思いますが、落井と松成との間に水争いが発生しました。その時、落井の人が二人犠牲になってしまったそうです。今でもその人たちの墓があり、祭られている事を聞いています。古老のおどけ話かもしれませんが、当時、日も暮れ、真夜中になると、オーイオーイと、水争いで犠牲になった人の呼ぶ声が聞こえて来たので、お



○「松成」の由来 伝説 松成町

現在、松成にある満願寺は、元々、中野町原にあった天台宗のお寺だったそうです。(第2次世界大戦途中までの釣鐘には原満願寺と印されていました)特に戦国時代においては、朝倉氏の支配下の影響により、周囲のお寺は、みな天台宗だったそうです。その後、蓮如上人が吉崎御坊へ行かれる道中、鯖江で浄土真宗の布教が行われたそうです。その影響で、いたるところで浄土真宗への改宗がおこなわれるようになり、満願寺もその時、浄土真宗へ改宗されたようです。この頃には満願寺は原から今の松成町へ移転し、「御法(正式に浄土真宗のお寺としての認定)をひたすらまつなりにけり」と言われ「松成」の地名の定着へとつながったと伝えられています。



○神様のほうたい 伝説 川島町

昔、加多志波神社が焼けた時、神様の片頬が焼かれたため、神社の後に湧き出ている清水で頬を癒されておられたそうです。これを村人が見つけて、仮堂にお連れしようとしたが、重くて動かなかったそうです。ところが、お宮をお守する人がかかえると、きわめて軽く、容易に仮堂にお運びする事が出来たそうです。その夜、夢のお告げで「片頬にやけどをしたから包帯を巻いてくれ」と言われたので、翌朝その通りにさせてもらったそうです。御神体には今も左の頬にやけどのあとがそのまま残っています。

ふるさと北中山より



○神様の足跡 伝説 川島町

昔、加多志波神社の観音堂に、物乞いが棲みついていた。ある時その物乞いの火の不始末から観音堂が焼けたそうです。その時、神様が馬で三里山のドツ(堂通)と称する山に三步で避難されたそうです。あまりにも飛び方が急であったため、岩に馬の足跡が鮮明に付いたと伝えられ、その岩が今も二つ残っています。村人がドツ(堂通)に向かうとき、たたりがあるという言い伝えから、足跡が二箇所残る岩に、必ずその辺りの三種類の草花をそなえて、道中の安全を祈り、この山に登ることになっています。

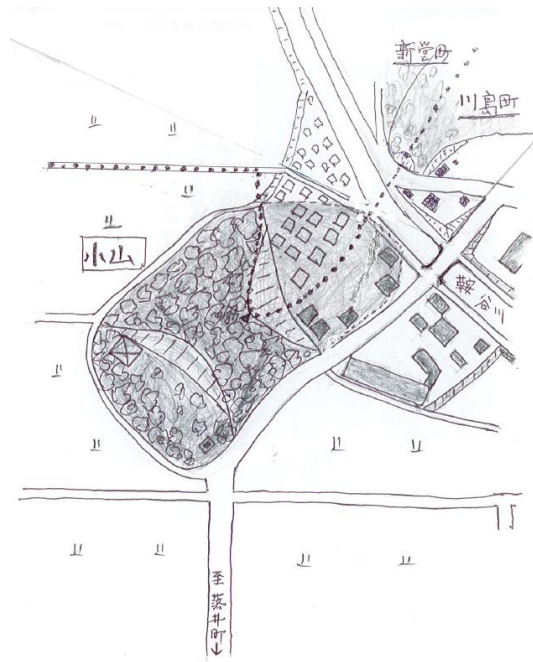
ふるさと北中山、鯖江市史第一巻民俗編等より



○小山 伝説 川島町

川島町の東端、越前市との境に高さ50メートル位の小山があります。昔
弁慶が奥州から京都へ大急ぎの用事が出来たので、大きな下駄(げた)を
はいて走って来たそうです。あまりに急いでいたため、弁慶は三里山をひとま
たぎに乗り越えようとしてしました。しかし、あと少し高さが足らず、下駄(げた)を山
にこすってしまいました。その時にできたのが「どつのはげ山」だそうです。

柔い所を通った時、土が下駄(げた)にくっついたので、それを取って投げ
たら、一つは川島的小山となり、一つは西庄境の今の明光寺の後ろの小
山になったと伝えられています。



○「堂の講」田の神まつり 伝説 川島町

川島町は現在 170 戸余りですが、昔むかし集落の発祥の時は 7 戸であったそうです。7 戸が住んだ所は、揚原織物の戸口工場から北中山分遣所あたりであったようです。ここは度々水害にあい、しかも風当たりも強く、獣にも襲われやすいので、安住地を求めて、三里山の麓に変わって行ったそうです。昔の地籍は、九反田(くたんだ)といい 90 アールのたんぼが有り川島の共有地でありました。農地開放前は、ここから生ずる年貢米をお金に替えて全戸に分配する代わりに、十数戸ずつ集まった班に配分したそうです。これが「堂の講」いわゆる田の神まつりの起源だそうです。「堂の講」は、毎年 3 月頃農作業前に一ヶ所に集まったそうです。各班では順番に宿をして、各戸から集まった主人達に酒食を供し、歓談しながら昔を偲んだそうです。戦時中に作られた「隣保班」に似ていますが、界地界地だけでなく、分家は必ず本家の班に入ったようです。また身分序列がはっきりしていて、お膳にすわる時も、勝手な事は許されなかったようです。

鯖江郷土史懇談会誌(川島町酒井奥左衛門)より



○雨乞い 伝説 川島町

大正のころ、何ヶ月も雨が降らず、大干ばつが起こったそうです。田んぼの稲や、畑の野菜が実らず、命にかかわるほど困ったそうです。そこで村人達は一度お面様をお願いしてはどうかと言うことになり、観音堂の前にある浄池の前にお面様をお出して「どうか雨を降らせて下さい。お願いします。」と言って村人達は勤行し村中をお練したそうです。手に手に竹の小枝を持ち、浄池の水を入れた手桶の水で枝先を濡らし、そのしずくをお通りするお面様におかけして祈願したところ、間もなく大雨が降って来て、村人を救ったと言われています。このお面様を雨乞いの御神体、そして追儺面として村人の信仰心を深めていったと伝えられています。

このお面様は後に国の重要文化財に指定され、御神体をお乗せした神輿も保存されています。また、現在でも竹の枝に餅を巻きつけた笹餅を縁起物として撒いており、今も、伝統行事として守り伝えられています。

ふるさと北中山より

村中をお練り



浄の池の水でお面様を清めた



○鼻高の面 史実＋伝説 川島町

加多志波神社に祭られている鼻高の面は、今から約 500 年ほど前の 1538 年に 3 百文もの大金で作られたそうです。作った人は大工の新兵衛という人です。お面の裏に作られた年月と大工の名前が書かれています。作風は素朴ですが勢いがあって立派で珍しい形をしています。

「鼻高」とは天狗のことです。山奥で聞こえる木を叩くような「カーン、カーン」という音、木の倒れるような「ギーギー」という音、「ズダーン」という音と地響き、聞こえるはずの無い音に人々は驚き、山から逃げ帰ったという言い伝えが山里にあります。山に入って修行する山伏は山には神様がいると考え、山で聞こえる正体不明の怪音を、わかりやすく描き出したのが天狗だといわれています。山伏が難行苦行して身につける験力を、天狗は始めから持っていると考えられています。葉うちわを持って空を飛ぶことが出来るのも験力の一つです。

川島の人々は大金をかけて、なぜ鼻高を作ったのでしょうか。きっと村に悪い事が沢山あって深く悩み、天狗の験力で救って欲しいと願ってのことではないでしょうか。また、豊作が続いて良い事があり、感謝の気持ちでお面を奉納する事になったのかもわかりません。

注:験力(げんりき)とは修業によって森羅万象を知り病気や悩みを直し、天変地異を予知し、争いを治めて人々の生命財産を守るすべてにおいて人間を超越した能力のこと。

鯖江市の文化財より

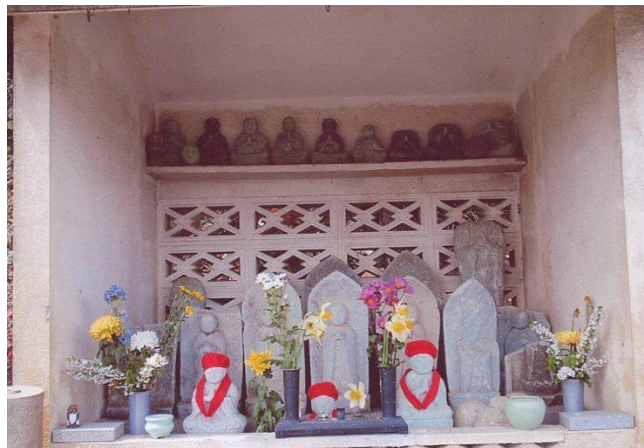


○ごんたろばこ 伝説 川島町

昔々、川島と中野原の境の森に「ガラ、ガラ、ガラ」と大きい音をたてて桶が転がり落ちたそうです。村人はびっくりして、開けてみると、生首が入っていました。それはこの村の権太郎の首でした。権太郎の首を、手厚くこの村の森に葬りました。今は共同墓地と地藏尊を祭ったお堂があり、明るくひらけていますが、昔は巨木などでうっそうとした森でした。道も山越えで、ここは誰一人通らないところで、川島七三昧（火葬場）の一つがあったところです。

ここは、「ごんたろばこ」と呼ばれ、聖地として恐れられていました。「ごんたろばこ」は権太郎という人の名前前で「ばこ」は、箱の意味かと思われます。昔は死人の首が入っていたのは桶だったのですが、「ごんたろおけ」といわずに、迫力を付けて「ごんたろばこ」といったのではないかとされています。また、権太郎の墓がある地名ということで、「ごんたろう墓」といったのが、「ごんたろばこ」に音便化したという説もあります。

この権太郎という人は普通の人ではありませんでした。「金輪切り」の名人だったそうです。鉄を鍛えて、輪、鎖、錠前等として、丸く作られた品を「エイッ、ヤッ」と掛け声もろ共、切り離すことが出来る人だったそうです。あまりの妙技に見世物小屋に出るようになり、諸国へ興行にも出て行きました。ある殿様にこの妙技を見せたところ、驚いた殿様は「こんな奴、生かしておいては、いつ我が金蔵を破る賊となるや知れん。また敵に付いたらどんな力を発揮するか分からないから殺してしまえ」ということで即座に殺されてしまったそうです。切られた首の入った桶が、たつ巻で吹き上げられ、権太郎の念力で故郷の川島墓地に戻って来たそうです。



○おめん様その1 伝説 川島町

川島のお宮に祀られてあるお面様は、一番先には市野々のお宮に祀られてあった。祭りの時はお面様を丁寧にしたが、平常は顧みなかった。村人が肥桶を擔(かつ)いで宮の前を通ると、肥桶がひっくりかへり、小便をすれば體(からだ)がはれ、又村に悪い病が流行ったので、村人はおめん様の精だと恐れて川へ流した。箱に入れられたおめん様はだんだん、だんだん流れて、川下の方へ来て高木のある老人に拾われた。老人は村に祀ったけれど、丁寧に祀らず、しまっただけで置いたので、おめん様は時々「島へ行きたい。島へ行きたい」と言われた。そこで村人は又もとの箱に納めて川に流したが、今度拾ったのは川島の老人であった。白い紐でくくってあったので普通のものではないと、初め村の寺へ持っていき、次にお宮に持って行った。おめん様が、島へ行きたいと言われた通りになった。村人は大事に祀った。早魃(かんばつ)の時であった。村の男は草鞋(わらじ)に白鉢巻でおみこしとして「おめんさんのおたびだ」と言って塩を撒いて村を往来し、老人が拾った所の川で、おめん様に水を浴びせかけた。そして2〜3日すると気持ちの良い程雨が降った。そこで村人は此のおめん様を雨乞いの神とするようになった。

「福井県の伝説」より 河合千秋編 福井県鯖江女子師範学校



○お面様その2 伝説 川島町

川島町の観音堂に祭ってある三鬼面は、昔妖魔が出て村人を悩ました時、三観音がこの面をかぶってこれを退治したものだという。その後、この観音堂の坊主が国高村の高木に移った時、これを捧持して行ったが、更に水間谷の市野々に移されたので、ここでお堂を建ててこれを安置し祭っていた。お面様は大変な荒神で、お堂の前をよごれた物を持って通ると、吹き飛ばされたり、馬に乗ったまま通ったりすると、馬もろとも飛ばされたという。ところが、このお面様、しきりに「島に行きたい。島に行きたい。」と言われるので、村人はこれを箱に入れて川へ流した。川島の東端(酒井商店の前あたりと伝えられている)で洗濯をしていた渡辺忠左衛門の老婆が、流れて来たりっぱな箱を、不思議に思って拾い上げて、あけて見ると三鬼面だった。市野々から流れて来たのである。驚いて観音堂に安置し、以来大事に祭って来た。ある大ひでりの年、村人がこの荒神に祈願を込めたところ一大降雨があったので、それからは、このお面様を雨乞いの神として祭るようになった。ちなみに、川島の餅まきは2月11日を恒例として、戦時中も欠かさず続けられて現在に至っているが、この日はお面様のご開帳をして、高木からは必ず区の役員が2~3人参拝するのが常となっている。お供えの餅も、高木の区と渡辺忠左衛門へは特別なものをわけるようにしているが、この慣習が今もなお続いているのを見ると、この伝承は全然架空のことでなさそうである。

鯖江市史 第1巻 民俗編より



○お面様その3 伝説 川島町

川島の観音堂に祭ってある父、母、子の三鬼面は、大昔、妖魔が出て村人を悩ませたとき、三観音様がこの面をかむって魔物を退治したそうです。今から450年ほど前の一向一揆盛んな頃に蓮華寺が焼けたとき十一面観音と千手観音が燃えてしまいました。村人の悲しみは深く長く残りましたが、残された聖観音と三鬼面を、さらにねんごろに祭っていました。ところがそれから20年ほど過ぎた豊臣秀吉が朝鮮を攻めていた頃のある日、川島に武士たちが現れて、軍のお金にするとって宝物を奪っていきました。村人は悔しくて泣きましたがどうすることも出来ませんでした。それから250年程の長い年月が過ぎた江戸時代の天保(1830～1844)の頃、小浜藩高木村では何年も続く日照りや、長雨による飢饉で死ぬ人が何十人も出るほど苦しんでいました。村人はこのような苦しみや悲しが多いのは、八幡神社に多くのお面様が祭られているのに、お面様を粗末にしていたからだと思い、特に、押されるような気配のある三鬼面を恐れて、早く元のお郷にお帰り願いたい。偉いお方にお面様をお見せしたところ「昔、川島の八幡宮にあった蓮華寺に祭られていたもの」と分かりました。ある日、高木村では、三鬼面を箱にお入れして、白い布に包み「無事にお帰り下さい」と願いつつ川に流し、お見送りしました。川島の老婆が鯖江で用事を済ませたの帰り道、横越の橋の上で一休みしていると、上流から白い布に包まれた箱が流れてきました。不思議に思って拾い上げて家に持ち帰り開けて見ると、三鬼面が入っていました。家の主人、忠左衛門は驚き、たいそう喜んで、村役人に知らせました。こうしてお面様は川島に帰ることが出来たのです。村人は願いが叶ったことを大変喜んで観音堂に安置して手厚く祭って来ました。

毎年おこなわれている川島の餅撒きは二月十一日を恒例として戦時中も欠かさず続けられて来ました。この日はお面様を皆様にご開帳をして高木からも必ず区の役員が参拝されます。

○おそうじこう(左義長) 史実 川島町

昔、川島町では火の神に感謝して火を大切にし、学問技芸の上達を祈るための「おそうじこう(お焼事講)」が昭和 8 年頃まで行われていました。田舎としては特筆すべき楽しい行事で、東出、中出、西出と3地区各々独立して盛大に行われていたそうです。運営は青年団を核に、小学生の中心人物は「親方」と言って、小学校六年生が担っていました。高等科の人は「元老」と言って顧問格で5年生以下は会員だったそうです。毎年2月7日になると「おそうじこう」の宿を決めて、子どもたちは学校から帰ると、地区毎に一戸一戸を回り、お金集めや、藁集めをして宿に持って行きました。集めた藁で青年団の人たちは、縄づくりや藁編みをして左義長に備えたそうです。そして旗竿に、書初めの半紙、女の厄年の人は布で作った燧(ひうち)や、鯉のぼりなどを取り付け、火の勢いで書初めの半紙が高く舞い上がると書道が上達すると喜んだものでした。東出から順番に火をつけて西出が終わると、お嫁さんは子どもを連れてヤブ入に実家へ帰る慣わしであったと伝えられています。

注 1: 燧(ひうち) は女の子が厄払いや、裁縫上達の願いを込め正月4日の針の持ち始めの日に作る。火打ち金の形のもので、材料は、ちりめん、羽二重、友禅などの上等の生地に、鶴亀、松竹梅などの染め出しの模様のあるもの三角形に作る」、その中にかんくずなどを詰め込んで縫うたものです。その三角の下両端から五色の細中ぎれをつり下げて仕上げる。男は額鯨を寄進する。旧西鯖江(今の桜町)

「左義長」悪魔をはらう燈り

平安の頃には、三毬杖(さぎちょう)と書かれ宮中や公家での正月行事の一つであったという。毬杖をゆわえた青竹を三組立て、正月に用いた短ざくや扇を燃やす儀式であった。民間では、十四日の夜、あるいは十五日の午前中に門松や、しめ飾りを書初めなどとともに道祖神で焼くのがならわしであった。道祖神がほとんどなくなったので氏神や広場などに持ち寄って焼くようになったという。

注 2: ヤブ入・2月15日には藪入り(川島町)むつつき(磯部町)といって、嫁さんが子供を連れて里帰りをし3~5日間里で骨休めをした。姉妹が3,4人寄ると里は孫たちでおお賑わいであった。

8月16日にやぶ入り(里帰り)をして墓参りをし、ゆっくり休養する。

○天狗松 伝説 川島町

三里山のドツ(堂通)の中腹、斉藤伊右エ門さんの山に根本から二つにわかれた巨大な松の木があったそうです。当家の人が山の木を切るために登ったところ、この松の木があまりにも大きいので気持ちが悪くなり、お酒を供えてみたところ翌日までにすっかり無くなっていたそうです。しばらくして、この周辺の山の持ち主たちが山仕事に精をだしていると、毎日同じ時間になるとこの巨大な松の木の上から天狗様が現れ、大きな葉うちわで「帰れ、帰れ」と言う合図をされるので、これは天狗様が修行をする時間だと悟り、邪魔にならないよう、そそくさと一度家に帰ったそうです。

この事が村中に知れ渡り、山仕事をしていてもその時間になると一度家に帰り、修行時間が終わった頃にまた山仕事を続けたと伝えられています。それから村人達は、ドツへ登るときは天狗松に三種類の花を供えて登るようになりました。現在は枯れた松と、それを記した標識が建ててあり、今も神聖な場所として伝えられています。



○五重塔 伝説 川島町

川島の加多志波神社(かたしばじんじゃ)の上に小さいお堂があります。今塔仏堂(とうぶつどう)といっています。昔川島に住んでいる武士に川島維頼(かわしま これより)という武士が住んでいました。文武両道に優れていて、村人にも親切であったので、四方から武士が集まって来て家来になったそうです。そこで蔵人は川島の三里山に大きな城を築き、四方から攻めてくる敵の見張り台として、今の加多志波神社の上に、壮大な五重塔を造って攻撃に備えました。数年の後福井方面から攻めてきた大軍のために、ついに維頼は討ち死にをしました。大將を失った味方の軍勢は勢いもくじけ、今はこれまでと城の中で自殺し、敵は城中に攻めいって焼きはらったので、蔵人一家はついに滅びました。

このようにして城はやけくずれて跡形もなくなりましたが、五重塔だけは何百年か残っていました。その姿は北陸道一番の美しさであったと伝えられています。しかし、ある日大風が吹き荒れて崩れ落ちてしまいました。そのときの殿様はこれをなげいて、どうかして再び建てたいものだと考えて、村人に、「一斗升(いっとます)にいっぱい黄金をあたえるから希望する者は造り直せ」とのご命令をされましたが、村人は、一升(いっしょう)まずに一杯の黄金と聞き違えてことわりました。このようにして、升(ます)違いのために五重塔の再建はなりませんでした。この五重塔のあとに今の塔仏堂を仮に建てました。今は小さなお堂の姿に変わりましたが、その当時維頼一族がいかに盛んであったかは、堂の土台の石の大きいのを見ても想像されます。

福井県の伝説、越前若狭の伝説より

塔仏堂



五重塔



○川島城址 史実 川島町

川島の山(三里山)の中に一つの石柱が立っています。川島に住んでいたと言われる武士「河嶋維頼」(かわしま これより)の城の跡と伝説えています。

今から 670 年ほど前、日本は南朝(なんちょう)後醍醐天皇(ごだいごてんのう)と北朝(ほくちょう)孝謙天皇(こうけんてんのう)の二つのグループに分かれて日本のあちこちで戦いをくりひろげました。これを南北朝の戦いと言います。

私たちが住んでいる鯖江でも激しい戦いがありましたが、河嶋維頼は脇屋義助(わきやよしすけ)という大将とともに、南朝方の武士として活躍しました。上戸口町にある三峯城からも出陣したことが「太平記」という本に書かれています。川島の山中に立っている石柱は、昭和 13 年に行われた維頼公 600 年祭の時に立てられたものです。

では、石柱が立っているところは、本当にお城だったのでしょうか。「城」というと、私たちは、丸岡城や姫路城のように高い石垣のある天守閣を思い浮かべますね。でも、河嶋維頼の城はそのようないわゆるお城ではなく、館(やかた)だったと考えられます。江戸時代に書かれた本『越前国城跡考』(えちぜんこくじょうせきこう)にも、館(やかた)の跡として伝えています。

現地に行ってみると、東西約 50m、南北約 60mにわたって階段状に四つの平らな土地が広がっています。平坦地(へいたんち)の東側には谷川が流れ、四つ目の平坦部分の北側には空堀(からぼり)(水をためることが目的でなく、敵が移動しにくいように地面をお堀のように掘り下げたもの)があります。また、空堀の北側は土が垣根のように積み上げられています(土塁どるい)。このことから、この平坦部分が屋敷跡(やしきあと)だったと考えられます。戦後は畑などに利用されていましたが現在は杉林となっています。

それでは、もっと広い目で川島町全体を見てみましょう。そのヒントとなるものに明治時代のはじめに作られた地籍図(ちせきず)(土地の区割りを表した地図)があります。川島町の小全図(しょうぜんず)を見ると、次のようなことが分かります。①東西にのびた集落の両端(りょうはし)に「東木戸」「西木戸」の字名(あざめい)がある。②条里が入っている水田には、「水落」「宮滝」「窪町」「深町」など、水に関係する字名がついている。

これらのことを、今の地形図と見比べてみると「東木戸」「西木戸」と言われる部分は、川島集落の東西の両端に位置する山が出っ張った部分に当たります。「木戸」とは「城戸」を意味し、朝倉氏一乗谷にある「上城戸」「下城戸」のように城下への出入り口・城門をあらわします。川島における「木戸」も川島への出入り口として、外の地域とは厳しく区別していたことが分かります。町内に住んでおられる古老の話によると、江戸時代のころは、斉藤トシ子さん宅の南側(三里山の山裾で、今は木が生い茂っている)が中心の道路であり、集落の両端にある出っ張った山の峠道を越えて行き来したというから、それ以前はなおさらのことです。

また、集落北側に広がる水田に残る「水落」「深町」「窪町」といった字名はこのあたりの田が沼田であったことを裏付けています。こうした湿地帯に囲まれた土地であり、敵から身を守るのに好都合であったと思われます。こうしてみると、川島の集落は、河嶋蔵人維頼の館を中心として、集落全体が敵から攻めにくい要塞の地であったと言えます。今でも「東木戸」と「西木戸」には峠の跡が残っています。



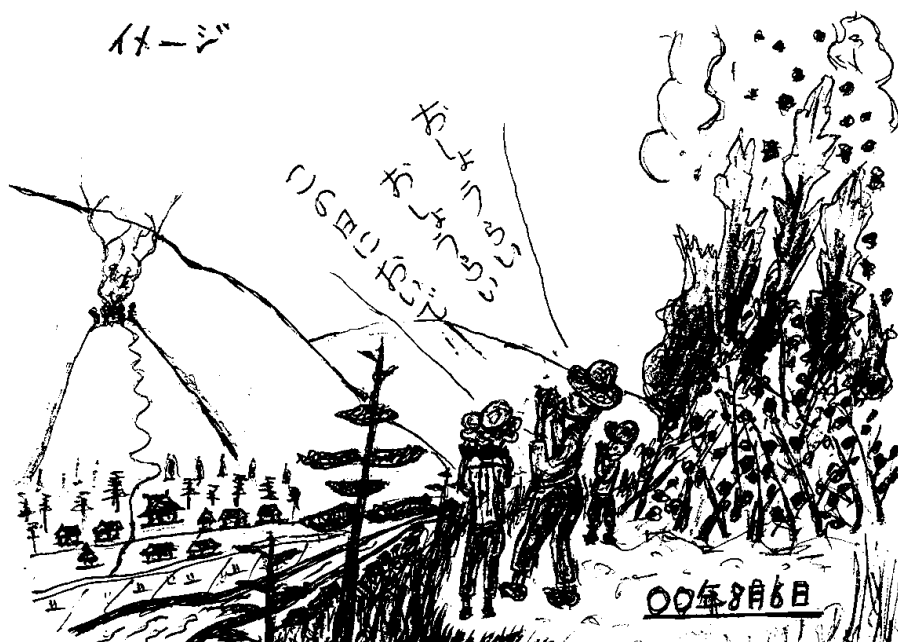
○ 霊を迎え、霊を送る 伝説 川島町

江戸時代のころ、川島では、お盆のころになると、先祖の霊を迎えるために、松明(たいまつ)をかかげて三里山に登りました。東出地区(川島集落の東の垣内かいち)の人たちは「七回り(ななまわり)」と呼ばれる三里山の尾根の頂きに、中出(集落の真ん中の垣内)地区は「中ケ岳」(なかがだけ)という尾根の頂きに、そして、西出地区(集落の西側の垣内)の人たちは「西ケ岳」という尾根の頂きに登りました。そして、それぞれの場所で、かがり火を焚き、「おしよらい、おしよらい、この日においで」と先祖に呼びかけ、霊を迎えたそうです。

お盆が終わると、村人は再び松明をかかげて山に登り、やはりかがり火を焚きながら。「おしよらい、おしよらい、この日にお帰り」と唱(とな)えて、先祖の霊を送ったそうです。

「おしよらい」は、御精霊(おしょうりょう=死んだ人の靈魂)が変化した言葉です。旧今立町赤坂地区には「松明山」や「盆山」という山があり、また、中野町原地区にも、「盆山(ぼんやま)」という山があり、これらの村でも、こうしたお盆の行事が行われていたのです。いつのころにこの行事がやんだかは、定かではありません。

出自 川島町古老の話による



○「新堂」は昔河嶋だった 史実 川島町

今の北中山地区は7集落ですが、以前は9集落でした。昭和30年に鯖江市に編入合併した時に、赤坂と新堂は北中山村から分村して今立町に編入しました。川島にとって新堂は隣村で寂しい思いをしたものでした。現在、川島から新堂に行くには酒井酒店の前を歩いて行きますが、昔はここに道は無く東山が鞍谷川まで迫っていました。この東山の谷に鳥越坂という道がありました。この道は新堂のお宮さんの上に通じていて、昔はこの道を行き来していました。宮下を鳥越と呼び、今も字名が残っていて「蓮如様のお池」と呼ばれる清水が今もこんこんと湧き出ています。

永林寺の言い伝えによれば、永林寺は約千年前に古墳山宗匠院とって国中にあり、この時は真言宗で国中大明神三八社の別当職になっていたそうです。ところが今からおよそ五百五十年ほど前に、沢山の建物が戦で焼けてしまったので河嶋の鳥越に新しくお堂を建てたそうです。それからそこを新堂と呼ぶようになったようです。

室町時代に蓮如上人が真宗を広めながら吉崎へ向かっておられた途中、この宗匠院に十二日間お泊りになったそうです。その時蓮如上人をお迎えして熱心に浄土真宗の教えを聞いてから宗匠院は真言宗から浄土真宗に変わったといわれています。その後六世了玄の時代(江戸時代初期)に今の場所に移って霊水山永林寺という寺名で再び出発したといわれています。新堂が河嶋とは別の村になったのはいつの頃かわかりませんが、蓮如上人からいただいた御影の裏書には「河嶋保新堂」と記されていますが、寛永13年(江戸時代初期 1636年)に本山より木仏本尊の免許が与えられた時は、宛先に河嶋の文字は無く当時既に河嶋とは別村になっていたと思われます。

南中山の伝説、今立町の文化財より

○河嶋左近蔵人維頼の子孫 史実 川島町

河嶋左近蔵人維頼（かわしま さこん くろうど これより）は、南北朝時代一貫して南朝方として新田義貞の一族に従い、後醍醐天皇の子の恒良親王（つねながしんのう）に側近として名を連ねて、脇屋義助とともに北朝方の斯波高経（しばたかつね）と戦った武将です。

維頼（これより）の子孫は、長男である河嶋維宗（これむね）を初代とする足利高松川島家として継承されています。河嶋維頼の孫の維貞は新田義興（新田義貞の二男）に従い、後に維貞は赤井氏に仕えたそうで、子孫の一人に館林城主の赤井山城守の家老となった河嶋宗満がおられます。何代か後に帰農して名主として栄え、古い住宅は、栃木県足利市の市指定史跡で下野・川島氏居館（しもつけ・かわしましきょかん）として現在も保存されています。当主は、足利市、館林市に住み、現在26代目で初代の河嶋維宗は、河嶋左近蔵人維頼の子であると代々言い伝えられ、名前に、維の一文字を代々付けておられるそうです。

26代目の河嶋氏からの聞き取り 文責 井波高博

伝河嶋維頼宝塔



○蓮華寺(れんげじ)の伝説 伝説 川島町

川島町にはお寺が2ヶ寺あります。応請山浄願寺(おおせざんじょうがんじ)と朝倉山専立寺(あさくらざん せんりゅうじ)です。

このお寺の起源は「応請山三光坊蓮華寺」と言われています。この「蓮華寺」には次のような言い伝えがあります。

大同年間(806年～810年)弘法大師が北陸道に来られたとき、この村に留まられて中山に草庵(そうあん)を営まれた。そのとき向山に向かって合掌(がっしょう)し「村人にご利益があるように」とお願いを請い(こい)お祈りをされた。すると不思議なことに池の中(塔の池)に蓮華が生え、天が応えて美しい花を降らせ三本の光が弘法大師を照らした。そこで、大師自ら応請山三光坊蓮華寺とお寺の名前をお付けになった。大伽藍(だいがらん)および五重塔があり、所属する末寺は慶裕坊(けいゆうぼう)光嚴寺(こうげんじ)を始め、そのほか十数ヶ寺あり。

注:「蓮華寺」の創建については泰澄大師とする言い伝えもあります。

鯖江郷土史懇談会誌 20号より



○竹細工 史実 戸口町

竹細工の歴史は千三百年の昔にさかのぼると伝えられています。まず三峯に始まって、その後上戸口、中戸口、戸口、磯部にまで広がったそうです。戸口では、みだれ籠(衣装入れ)文書籠(文庫)眉籠、また特殊なものとして飛行機の燃料タンクも作っていました。中戸口ではあじろ笠など、竹製品が全国に出荷されていたそうです。

当時福井県庁に県の副業振興を担当する課があり、課の荒川技師の指導で東京神田に福井県副業品物産斡旋所が昭和20年近くまであったそうです。荒物問屋を通じて、河和田の漆器と共に全国へ出荷していました。

戸口の町内でも竹工業の製造に関わった家は総戸数(120軒)の3割近くが製造に関わり、後には一乗谷に教習兼、分工場を作るほどの大忙しで、中に今立や小浜あたりからも仕事に来ていたようです。竹細工産業は地域の所得を増やし、藁葺き屋根の家は瓦葺の屋根に改善されるなどの成果がありました。しかし竹細工は手作りで機械化が困難で生産高に限界があり、技術取得に年月を要し後継者不足が生じていたようです。また、生活様式も変わり竹細工の需要も少なくなり、徐々に竹細工産業は衰退し現在は、ほとんど無くなってしまいました。今はその繁栄を偲ぶように、戸口町の野原竹工所の地に竹細工の普及振興があった証として、当時の福井県知事小幡治和氏直筆の石碑が建てられています。



○観音堂 史実 戸口町

平安時代 延久年中(1069～1074)当村甚衛門全盛の時、我屋敷の傍らに此の観世音を安置奉り我が守り本尊と崇め奉り候ところ、寛政年中(1789～1801)に及び甚衛門盛陰(じょうおん)に至り。我が屋敷の内御式地石之山畑五十四歩を寄付し奉り、村方へ差し出し候故、今に相違無く村方にて御支配仕り候。

「神社明細書上」(明治3年鯖江藩庁に提出)

この観音堂の堂宇は建立以来200年近く、かなり老朽化したということで、改築されることになり、堂の解体が昭和47年(1972)4月に着工された。その際 発見された奉納板の記録で、寛政10年(1798)の改築であり別のお札が延享3年(1746)と記されて、改築の52年前に奉納されたものであり、由緒に拠れば大本は延久(1069～1074)年中とあることから、このお堂は900年以上の昔から祭られていたことになる。

改築されたお堂は総檜造りで、正面の石段も笏谷石と立派なものです。3月18日だった祭りは4月16日に現在も行なわれている。

さて、この古いお堂を解体してみるとまだしっかりしているので、中戸口の石地藏の祠にしようと地元の人たちの奉仕でガラ地籍に移築され戸口町では一番古い建物とされます。

「ふるさと北中山」より



○「柿根寺」と「白山神社」 史実 戸口町

昔、むかし戸口と別司の村境の鎌数谷に柿根寺という寺があり、本尊は泰澄大師の作と伝わる聖観音菩薩でした。

奈良時代の中頃(天平勝宝年間 749～757)に都から坂上(さかのうえ)○○とかいう方が流されて来て、寺地に祠をつくり「伊弉冉尊(いざなみのみこ)」を祭り、柿根寺の本尊と共に心から信じて、功德を積んだので「都」へ戻ることができました。以来村人は神仏の慈悲深さを知り、村人の信心もより深まったそうです。

村人 相諮りて境内に一社を造営することになり、これが白山神社の創始と伝えられています。

「建武」の頃(1334～1336)、兵火により消失しましたが数年で再建。当時は真言宗でありましたが、文明3年(1471)蓮如上人が越前の国を巡回の節、住職「円善」は帰依して真宗となり、現在の地に寺を移した。慶長20年(1615)乗誓坊によって本山より開山を認められる。

“宗旨”の違いからか、柿根寺と本尊、白山神社は鎌数谷に残しました。しかし朝倉家と信長の(一向一揆の)戦いで再び兵火に罹り、縁起宝物等に至るまでことごとく消失し、以来社寺共に廃絶するに至りました。

しかし御神体のみは、密かに避難お守りする者ありて、災厄を免れしも久しく、祭祀を行なうことも無く 土蔵の中に忘れられ、いつしか所在を知る人として無くなりました。

元和3年(1617)正月2日、河和田谷中村の人 善右衛門の夢に神のお告げがあり「吾は鎌数谷白山神社の本神なり。汝 須らく(当然)速やかに下戸口村に行き村人に諭し、社殿を建立して斉き祭らしむべし。」

と善右衛門夢覚めて大変驚き、直ちに下戸口村に駆け付け神託を告げれば、村人も大いに恐縮し、草分百姓拾八軒の人 相諮って社殿を造営して御神体を奉安し、以来今日に至る迄毎年輪番に宮守となり厚く祭祀を怠らずと言う。

「鎌数堂観音略縁記」(宝永3年(1706)書)

「神社明細書上」(明治3年役所へ提出)

○石祠(観音堂境内) 史実 戸口町

元和3年(1617)通端与七が、戸口に小祠を設け鎌数谷から観音様を迎えてお祭りしたのが始まりとされている。

かつては正殿だった「石祠」は今も境内の北側に置かれ白山神社の末社として観音堂と共に祭られている。

「鎌数堂観音略縁記」(宝永3年(1706)書)

○あじろがさ祭り 伝説 戸口町

昔、戸口にあじろという人が住んでいました。あじろは常に何か発明したいと考えていました。ある時、竹で笠を作り上げ、その笠を何枚か作りました。それを上戸口や中戸口の人にもまねて作るようになり、笠作りは徐々に3戸口に広まりました。しかしその後は中戸口だけになり、中戸口では毎年かさ祭りを開催して、たいそう賑わったそうです。

鯖江東部土地改良事業記念誌より



○ 火まつり 史実 戸口町

戸口町に、昔から今も尚大切に伝わっている「火まつり」という伝統行事があります。

昭和初期頃の話(戦前の頃)ですが、この頃下戸の口村の戸数は 80 戸程でした。高等小学校の男子が親方になって行う、火まつり(左義長)の行事がありました。

火まつりの行事は2月5日で旧正月の楽しみの一つでもあり、村をあげての子ども的一大お祭りでもありました。火まつりの火揚場(かがりば)は、下戸の口村を二地区(ずし出、のはら出)に分けて行っていました。左義長の準備には、各家から藁(わら)や味噌など、使う材料を集めて歩き、縄をなう者、こもを編むもの、山から松の木を切り出すものなど役割を決めていました。そしてそれらの作業を行う宿も決めていたそうです。作業所の当番を引きうけた宿宅では、それは、それは大変なことでした。中心になる松の木の高さは今の二階建てより高いもので、これも若者が山から切り出して来たものでした。1月～2月頃は山に雪があり引きずって下ろしたそうです。

火まつりの飾りものは、ふきぬき(直径30～50Cm、長さ50～80Cm位の紙に絵を書いて筒にしたものを作り、その筒の下に短冊をつけたもの)及び、書初め(わら半紙6枚位つないだもの)を、火煙りの上にかざして、どちらの火が高く上がるかを競ったそうです。左義長(どんどやき)が済むと、子ども達は、乗誓寺のくに集まり、お寺さんのお針子さんたちのお世話で餅を焼いてもらって食べるのが楽しみのひとつでした。この時焼いて食べる餅は、正月餅より一周り大きい餅を特別作って持って行ったそうです。こうした村の行事に、いつの頃から青年団も加わりずっと続いていましたが、戦争で一時中止となりました。

終戦(1945年)後、この火まつりの行事は無くなりましたが、中学3年生が親方になって、村中の子ども達が、お寺さま(乗誓寺)に集まって遊ぶようになりました。親方(中学3年生)は、火まつりが近くなると、一軒一軒お金を集めに歩きます。そして買いものをします。その年に結婚とか、出産とか、お目出度い事があった家では、特別たくさんお金をもらい、集めたお金で、村中の子どもを遊ばせたそうです。午前中 1 回、午後1回の、くじ引き、宝

捜しなどをする景品を買いました。お寺さんには、家から焼き餅を持っていき、お寺さんのお手伝いさんが世話をし下さり、昼には味噌汁(揚げ、かぶら)を皆で食べました。

昔ながらの左義長(どんどやき)は、今から 20 年程前に壮年会の手で復活して、成人の日に行っております。この日、町民は白山神社へ書初め、しめ飾り、御札などを持参して燃やし、ぜんざいをいただいて一年の無病息災と豊年満作を祈願しています。

戸口町山村民子氏の資料より

福井市徳光町八幡神社の様子



○村を守っている椿 伝説 戸口町

昔、おかし下戸の口に、竹籠を作って暮らしている男がいました。毎年冬も近くなると持山に登って、次の年に使う竹を切って運び出していました。男は竹藪に着くと、椿の木に持ってきたお神酒を注いで「今年も元気で仕事が出来ました、来年も頑張ってお働くことが出来ますように」と祈って、辺りを見廻してから椿の木の横を掘り、埋めてある瓶の中に、今年蓄えたお金を入れて又埋め戻して竹を切り始めました。

こうしたことを何年も続けていたある日、我が子の火遊びで男の家は燃えてしまいました。何もかも燃えて無くした男は「困った。困った」と言いながらも、内心椿の木の横に埋めた「あの金を使おう」と決めていました。何日かして元気な足取りで山に登ったところ、どうしたことか、瓶を埋めた場所に一丈(3m)余りもあるような大きな岩が転がり落ちて、かろうじて椿の木に寄りかかるようにして止まっていました。木を切れば岩が転がり落ちて、下の村が大変な事になると思案しました。男は頭をかかえて「何でこんな事になるのだ」と「神も仏もいないのか」と力なくふらふらと帰っていきました。

村人が建ててくれた仮家で、寂しそうな男を見かねて妻が「貧しくとも今迄のように明るく元気に働けば何とかかなりますよ」と言って明るく振舞いました。男も思い直して今迄以上に仕事に励みました。そして年と共に子ども達も仕事を手伝うようになり、男は竹籠作りの親方となって村の暮らしを少しでも良くしようと村役も努めていました。暮れになると何時ものように、子どもと共に山へ竹切りに行き、何時ものように椿にお神酒を注いで「よくぞ大岩をここで止めて下さった」と一人お礼を述べ、若く甲斐がいしく働く子ども達を嬉しそうに眺めていたそうです。今では岩の下にお金が入っているのを知る人は誰もいません。そして誰も知ろうともしません。

○でんでら坊 伝説 戸口町

下戸の口のお宮様の横の道を登って行くと、山の中腹より少し下で観音堂から登って来た道とが交わるところがある。そこには大きな岩があって「でんでら坊」と呼ばれていて、昔の子ども達はその岩に駆け上がってよく遊んだそうです。

しかし今では土ばかりの山にどうしてこんなに大きな岩があるのか、子ども達は不思議に思っていました。今は生い茂った木々の中に大きな岩は身体を忍ばせているのではないのでしょうか。



○狼谷婆々磔刑岩 (おかめだに ばばはりつけいわ※杉説もあり)伝説 中戸口町

昔、朝倉義景と織田信長が(天正元年・1573年)、賤ヶ岳(しずがだけ)で戦った時、上戸口の太郎という者が、朝倉方のさむらい人足となり、戦場で旗持ちの役をつとめたが、戦の途中、太郎は旗を捨てて逃げ帰ったそうです。朝倉方は、戦に敗れたのは太郎が逃げたからであるとして追手を向けたが、行方をくらましてわからなかったそうです。老母はこれを聞いて大いになげき「若い者を殺す心は情にしのびないから、私が身代りになって刑を受けます」と、申し出たので、この狼谷の岩の所で、磔刑に処せられたと伝えられています。いつのころからか「ばばはじけ」と呼んでいますが「ばばはりつけ」が転訛(てんか。発音がなまって変わること)したものと思われます。



○ どうしょう畑 伝説 中戸口町

昔おかしのある夜のこゝと、白い衣を着た神様が、長者の家に現われて、「この村の横にある山が崩れるから、村人は逃げるように」と、夢のお告があったそうです。長者は非常に驚いて、さっそく村の人々に知らせたそうです。村人は「そんな事があるものか、少し気が狂ったぞ」と、笑って相手にしない人や、中にはそれを信じて思案にふけた人もいたそうです。信じた人たちは連日夕方になると、畑に集まり「どうしょう。どうしょう」と相談していました。

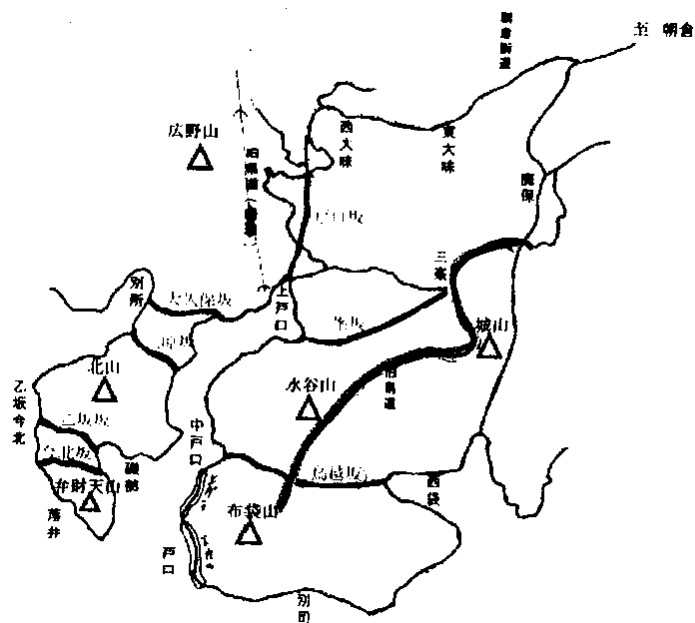
こうしているうちに、山頂から「ゴー」とものすごい岩なだれがやって来ました。残っていた人はあわてて逃げましたが、岩石や木の株、土の下になってしまったそうです。神のお告を信じて逃げた人は、方々に分かれて家を造ったそうです。これが今の上・中・下戸口であると伝えられています。

後にその辺の畑を「どうしょう畑」と呼ぶようになり、なお山の崩れたところを、今は「ガラ」といっています。これは「ガラ、ガラ」と岩石が転がって来たからだといわれています。



○馬道 伝説 中戸口町

中戸口町の東の山の峯通りを「馬道」と呼んでいます。昔、朝倉義景の一族が、三峯城から馬に乗ってこの峯通りを往復したといわれています。三峯城は敵を見張る要地であって、カカルマル城(弁財天)と丹生郡越知山に物見櫓を設けて、敵が海から上陸するときは、越智山で火をたき「のろし」をあげたそうです。それに応じてカカルマル城でも「のろし」をあげ、それを三峯城から一乗谷の朝倉の本陣に合図したと伝えられています。また、この馬道と交差するように中戸口から西袋へ行く峠道があり、鳥越坂と呼んでいます。昔は下駄履きで通れたといわれていたので道はとても良かったのでしょう。今は人が通らなくなりましたが、明治、大正の頃までは相当往来があったそうです。いつの頃か、太神楽の一行がこの峠を越えようとしたが間違っ馬道に出てしまい山の上で神楽を舞ったことがあったそうです。つまりこの道はとても広い道だったのです。しかし現在は隆盛を極めた面影はどこにも見られません。「青嵐 馬道駆くる 音聞こゆ」森下流子



○網代笠 史実 中戸口町

今から遡ること1300年程前、三峰村が誕生したと言われる養老年間（717～724）泰澄大師に教えてもらったと口伝えのある網代笠がこの三峰村で作られていた。その技術が山麓に伝わり三戸口磯部で生業の一部とされ広がったと言われています。とりわけ耕地面積や米作農家が少ない中戸口は「竹笠」の生産が盛んで全戸が関わっていた。中戸口で笠づくりが始まったのは宝永（1704～1711）のころであろうとつたえられているが明治の頃は饅頭笠（人力車夫、郵便配達人が多く使った）づくりでかなり広く県外に売りさばかれていた。

千葉県銚子へ売った代金を敦賀まで受け取りに行ったという記録がある。代価は一枚二文（約200～240円）であった。明治28年ごろ檜笠が流行しだした。これにヒントを得て同じ笠の竹笠編みを工夫し笠の頂点（トンガリ）に桜の皮を使用する（檜笠は金）ことを考え出したのが森川晋吉という人でこの人は大変器用でいろいろと新しい手法をあみ出しそれが京都方面で人気を呼んだのです。京型、天台をはじめ特殊な笠を開発したのがこれ又器用で有名な中村由松であった。

かくて明治、大正となかなか盛んであったが同時に仲買をする者もふえた。なかには暴利をおさぼるような気配も出て問題となりその弊を除くべく「中戸口竹製品購買販売利用組合」が大正14年9月5日に設立登録記され村中でのしこりは解消した。盛んなころは毎年3月3日に旅芸人を呼んで「笠祭り」も盛大に行われた。利潤は生産高に応じて還元されたし、公共的なことに組合の名で寄付もしてきた。

しかし時代の流れはすっかり往時のおもかげを失い現在は全国でも中戸口の三軒だけになってしまいました。

笠にも百姓笠、天台（大、中、小）尼笠、京型など色々な種類がありました。

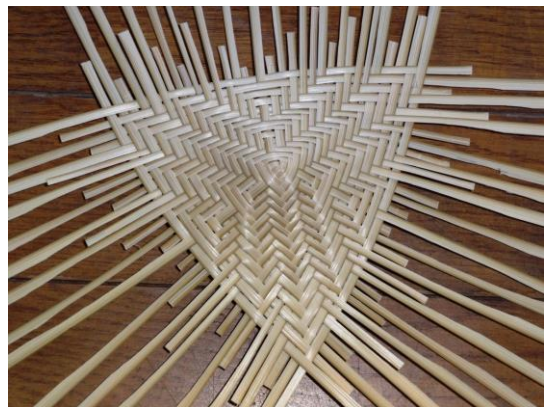
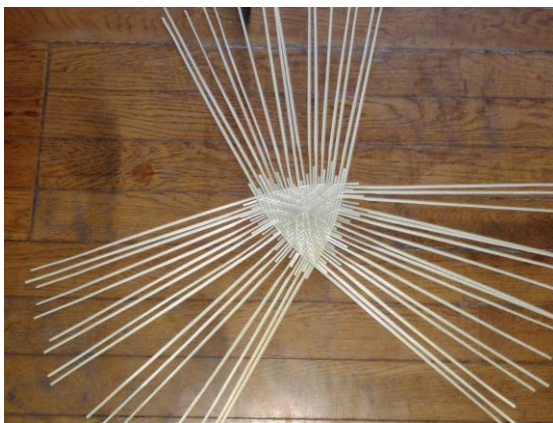
真竹で丁寧に編まれた最高級品の笠としてその丈夫さといい伝統的な形にみる品といいこの笠にまさるものはなく、現在では比丘笠が僧侶の正装として必需品であることから注目もされ重宝がられているが生産量の点でまったくの手づくりで一人前になるのには10年かかるとさえ言われ長い年月をかけなくては習得できない根気のいる仕事なので後継者が得がたく将来が案じられている。

時折歌舞伎座や、映画会社等から昔ながらの笠の注文があって話題になることもある。

「御本山と地場産業の町—鯖江」

「鯖江東部土地改良事業記念誌」

「村誌 ふるさと北中山」等より



○いぼ落しの岩 伝説 上戸口町

上戸口町の「刀那の滝」の、滝つぼの手前 50m くらいの川沿いの道ばたに大きな岩があります。その岩のてっぺんに直径 10 cm、深さ 5 cm ほどの穴があります。その穴の中には常に水が溜まっていて、その水をいぼにつけると、いぼが落ちると伝えられています。

また、この水を使った後は谷川の水を、その穴に注いで帰るのが慣わしとなっているそうです。



○乳の出る銀杏 伝説 上戸口町

今はなき、三峯集落の神社境内に、周囲一丈三尺(約 4m)余りの大きな銀杏の樹がありました。この樹は霊木で、樹皮を削って煎じて飲めば、必ず乳が出ると伝えられていました。昔、足羽郡麻生津村三十八社に泰澄大師がお生まれになった時、母君は乳が出なくて大変苦しまれ、神仏に祈願されたそうです。満願の日の夜に夢に神が現われて、「乳なくして困るならば、三峯という所の神社の境内に銀杏の大木があるから、その皮をもらい、煎じて飲むがよい」と告げられたそうです。母君は大変喜んで、直ちに三峯に行き、樹皮をもらい受けて煎じて飲むと、たちどころに乳が出たと伝えられています。

この大銀杏の樹は昭和 48 年(1973 年)に県の天然記念物に指定されていましたが、昭和 56 年(1981 年)の 56 豪雪で折れてしまったため、解除されてしまいました。しかし、根回り 8m もあった大銀杏の根から再び枝が伸びて再生を果たし、現在では鯖江市の天然記念物に指定(平成 12 年 2000 年)されています。



○ 赤橋 伝説 上戸口町

昔々、上戸口町の戸口川(血の川の支流)の中ほど(朝倉山正源寺の前)に赤い石の橋が架かっていたそうです。その赤い石は城山の坂下の聖なる山から切り出されたものだそうです。この赤い石で出来た橋の下をくぐると「おこり(伝染病)」が治ると昔から言い伝えられています。

上戸口町の古老からの聞き取り

赤石の地伏石 史実

旧三峯村に「越前の三助」と称された山崎久助家が在った。

主屋は、昔ながらのわらぶきであったが、けやきづくりのがっしりした構えは旧家の貫禄十分であった。傍らに梁間四間半にこもづりが三間半の総けやき造りの土蔵があった。間口三間一かね(一尺五寸)奥行六間、これまた堂々たるもので、その地伏石は一尺二寸に一尺の長さ二間の赤石で、上戸口の赤岩から切り出したものだという、こんな長尺ものをどうしてきり出したのか、それをこの山上までどうして運んだのか、想像しかねると古老はいう。

聞くところによると、土蔵の奥には、質草を保管しておく棚がつくってあったという。質草を持って金を借りに来るのは三峰の住人だけに限らず、村里のだれかれが山崎家へ金を借りに百坂をあるいは鹿俣坂を上って来たといわれる。

山崎家が三峯を離れて主屋は鹿俣村へ(以後焼失)、土蔵は東郷の手利酒造に移築され現在するという。赤石の地伏石も供に移されたものと思われます。

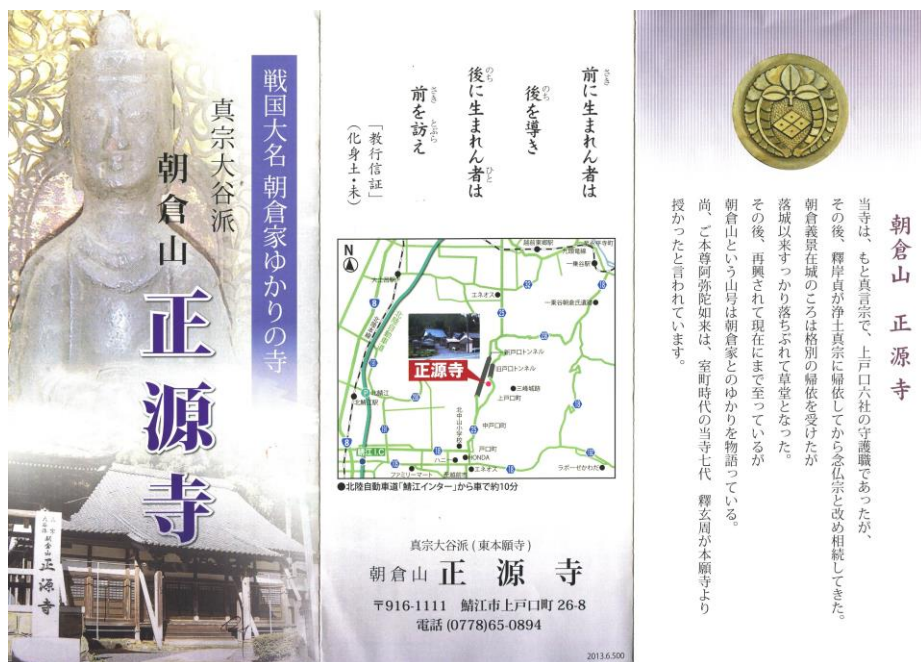
※教本(58)にも「赤橋の今昔」磯部町があります。

※「おこり」は「間欠熱」のことで、きまった時間をおいておこるマラリア性の熱病。

○盗まれた観音様 伝説 上戸口町

上戸口町と足羽町(現福井市)の境に観音ヶ岳という山があります。昔この山の頂に正源寺がありました。寺には身の丈九寸ほどの観音像が安置されていましたが、いつの間にか盗まれてしまいました。ある日のこと上戸口の正源寺の住職の夢に、観音様が現れて「お前の寺に帰りたい。明日迎えに来てくれ」と言われたそうです。住職は早速、坂を越えて迎えに行くと、上文殊地区をはずれた辺りで、商人らしい人が、箱を背負って来るのに出会いました。商人らしい人は住職を見ると声をかけてきました。「あなたはもしや上戸口のお寺のご住職ではありませんか」と言うのです。「そうです」と返事すると「実は昨夜、この背負っている観音様が、一刻も早く上戸口の正源寺へ帰りたい。と申されたので、今お届けするところです」と言われました。それならば、と言うことで住職は寺に持ち帰り、その不思議に驚いていたと今も伝えられています。

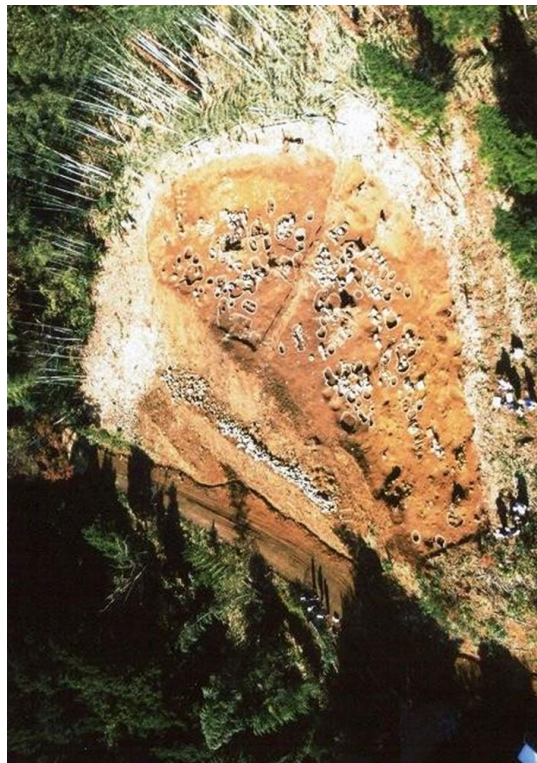
鯖江市史第1巻民俗編より



○三峯寺 史実 上戸口町

かつて上戸口町の山の上に三峯村という集落がありました。三峯村跡には「坊屋敷」という地名が残っていたり、その墓地にはたくさんの墓塔類があり、その中に「大永6年丙戌(1526)6月2日午刻、権大僧法印良倫」の銘があったり、かつて寺があり、僧がいたことがわかっていました。また、京都の東寺が所蔵する古文書の中に「三峯寺、十四人、壺貫六百文、文安2年1445年」とあり、この寺が「三峯寺」と呼ばれていたこともわかりました。また、三峯寺の本尊は、平安時代後期の聖観音菩薩立像で子安観音と言われ、安産を守る神様として有名で、広く信仰されたそうです。近くにある大いちょうは、乳の出るイチョウとしても知られています。

鯖江市教育委員会文化課資料より



○三峯村 史実 上戸口町

昭和 12 年まで上戸口町の山の上に三峯村という集落がありました。三峯村は標高 300m を越える高地にどうして集落が出来て、どのように生活していたのか不思議です。

言い伝えによれば三峯村は養老年間(717～724 年)に村が出来たそうです。泰澄大師にまつわる乳銀杏の伝説もあります。三峯村の旧家山崎家は朝倉の武将であったとも言われて、江戸時代には福井藩主から特別に袴の着用を許されていたそうです。藩主の領内巡視の際は三峯で休息するならわしになっていました。山崎家の文書には文化 13 年(1816 年)のご一行の人数は 238 人と記録されています。これだけ大勢の人の接待が出来たのは同家の財力もまた相当なものであったと想像されます。この時のもてなしを賞(め)でて、葵の紋が入った膳と、金銀蒔絵の椀を殿様が山崎家に下賜(か)されたそうです。山崎家は中世から近世にかけて俗に「越前の三助」と言われる高持でした。しかし、時代の流れとともに資産も減少し、竹や藤細工、油桐の実の採取なども採算が取れにくくなり、明治中期になると山村での自給生活はいよいよ困難となりました。また、子ども達が上戸口の分校へ通学するのも苦勞で、特に降雪期の通学は大変だったそうです。このような事情から村を離れるものが相次ぎ、大正末期には半数の 6 戸だけとなり、昭和 12 年には「おもや」山崎久助も上戸口へ移住して、昭和 13 年に三峯は上戸口に編入合併して、村は無くなってしまいました。

**山崎久助さんの家
(庄屋さん)**



**お殿様からもらった
葵の紋のお膳とお椀**

○三峯のくらし 史実＋伝説 上戸口町

三峯村は、ふもとの上戸口町集落センターから北側山道約4km、標高約300mの山頂付近にありました。

このように不便な山頂に1300年以上もの長い間、集落があって人が住んでいたのです。

三峰に集落が出来たのは奈良時代、それ以降のほとんどは現代のように便利な社会ではありません。一般的な農村集落の人々のくらしは電気も石油もない、自然と共に生きる自給自足の生活だったのです。

生活の主な仕事は農業で、殆どの人は鍬と鎌で田畑を耕し、燃料は山から得る薪が中心の時代だったのです。

現代の様に便利な自動車や電車のない時代でしたから、道路は狭く曲がりくねっており、隣町やほかの集落へ行くにも大変便利が悪く、農業も一人で栽培できる耕地の面積は限度があり、生産をあげる為には多くの労働時間を費やさなければなりませんし、また、テレビやスマートフォンといった電子機器はもちろん、ラジオ、電話、新聞雑誌さえ無い時代でしたから、住民が情報を得るためには説教に来るお坊さんや薬売りや鎌商いなどの行商人から得る情報しかない、閉ざされた時代だったのです。

そうした時代の越前の国を見ていますと、奥越地方には奈良興福寺の荘園や一大宗教都市勝山平泉寺、一乗谷の朝倉氏等、その時代に応じて大きな勢力がありました。そして今の県庁に当たる役所は、府中（武生）や、一乗谷にありましたので、奥越から府中や都（奈良・京都・江戸）等への行き来は少しでも近道の「山越え」等を選び、その主要道路は三峯村を通りました。

三峯村を通る道を「三峰街道」と称し、ここを行き交う役人や、行商人、僧侶等によって三峯村には全国のいろんな情報がもたらされ、宿場町的要素をはたしていました。

また、三峯村にはアブラグリの木の栽培という産業がありました。アブラグリの木の実は、良質の乾性油が採れ、雨傘や提灯の塗料、船体や住宅の防腐剤、和紙に塗った油紙はお産の際の敷布として重宝がられたそうです。又、樹皮は皮をなめすタンニンや衣類の染料に利用され、幹は木炭にして漆器を磨く研磨剤にもなりました。

そのほかにも土木工事になくてはならない藤ズルモッコ作り、養蚕、衣類の綿花や麻の栽培、季節の山菜や薬草を採るなど、この三峯村にはほかの集落にはない恵まれた仕事があったのです。

三峯村の跡地に立って周囲をみると南側の展望が良く、東の空から昇った太陽は長い間三峯村を照らし北側には塀風をたてたように山があって北風を遮り、長い時間村に暖かい日が射し、自給自足の貧しい山村集落の中であって、案外暮らし良い所であったと思われ、1,300年という長い間人が暮らせたのではないのでしょうか。

しかし、電気や石油を利用した機械文明が発達し、子供達は学校にいかなければならない時代になると最早この山奥には人が住めなくなりました。

明治7年に11戸、58名の三峯村は、昭和12年11月最後の1戸が村を離れ廃村となりました。

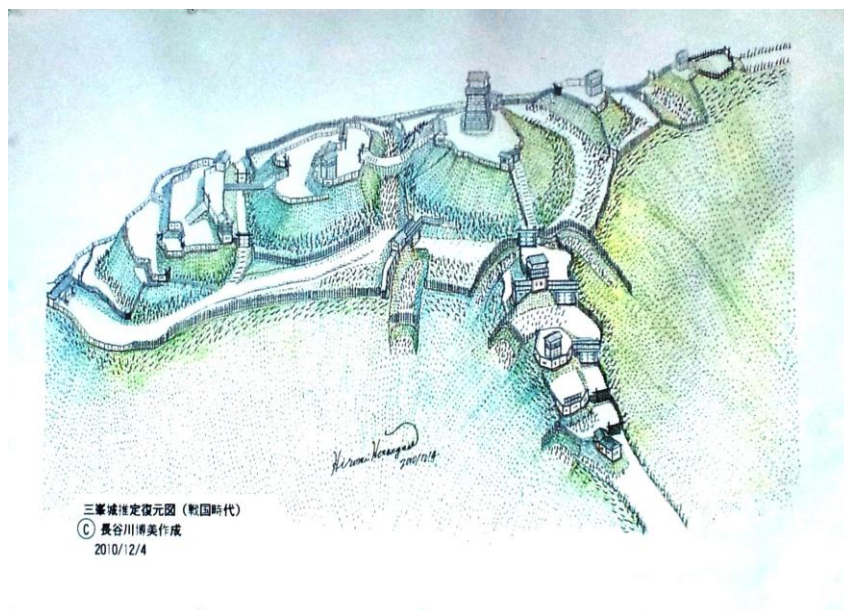


三峯城 史実 上戸口町

三峯城は、山城で、三つの峯のあわさった城山の山頂部を中心につくられています。郭、腰郭、堀切、竪堀、土橋などの防御施設があります。その主要部の規模は南北約 150m東西約 100mです。城からは、大滝城、二峯城(松山城)、三床山城、波羅蜜城、鷹巣城などを望むことができます。

この城は、南北朝時代、越前で南朝方と北朝方とが合戦を始めてから、延元2年(1337年)、今まで北朝方に味方していた平泉寺の僧兵が、兵を二分して南朝方にも味方するようになり構えた城で、伊自良次郎左衛門尉(300余騎)脇屋右衛門佐義助(500余騎)、河嶋蔵人惟頼らも入城したそうです。三峯城兵は、日野川、府中の合戦、足羽七城攻略の合戦、黒丸城の合戦などで活躍しましたが、暦応三年(1340年)、北朝方に東の屋根から攻め込まれて落城したそうです。その後、戦国時代に一乗谷城の支城として活用されたそうです。この山城は鯖江市内では太平記と軍忠状の両方に登場する唯一の城です。

三峯城跡保存会資料より



○ 鉈傷御影と血の川 伝説 上戸口町

上戸口の善照寺の宝物として残っている通称「なたきずのご開山さま」は、本願寺十二代准如上人の筆によるものと伝えられています。今から三百五十年ほど昔、この寺に了西という住職がおられたそうです。住職は親鸞聖人御影の表装を金らんに直したいと京都に出かけたそうです。途中檀家頭を訪ねて了解を求めました。竹を割っていた檀家頭は表装替えに強く反対し、怒って鉈を投げつけました。鉈(なた)は了西の眉間に当たり倒れ、了西は村人により寺に運ばれたそうです。村人により介抱された了西は寺に帰り、気が付いて自分の頭を撫でて見たが少しの傷も痛みも無かったそうです。すると不思議なことに檀家頭の下の水が血潮になって流れているのを村人が見て了西に告げたそうです。了西は不思議に思い御真影の入っている箱を開けてみると御真影が血に染まっていたそうです。さらに御真影を広げてみたら高祖親鸞聖人の頭額が二つに切れていたのです。了西は我が身代わりとして難儀に遭われたお姿に感涙し、早速血を洗い落としてひそかに上洛し修復したそうです。しかし日が経つにつれて御真影の額の傷痕が、再び浮かび上がって来たそうです。その後も度々修復したのですが、再び三度と傷痕が浮かび上がって今でも拝むことができます。「これは凡夫のために親鸞聖人の慈悲の心を示された現れであると」御真影を住職は大切にしましたそうです。

檀家総代とのトラブル発生



○お堂と坂下氏子 史実 上戸口町

上戸口町の坂下に堂の下という地名があります。その土地の少し山に上がった所にお堂があります。昔、このお堂には修行僧が山籠(やまごもり)りをしていたそうです。

現在そのお堂を管理しているのが、坂下氏子と言います。坂下氏子とは朝倉山正源寺の檀家で、昔々、お寺がお殿様から頂いた土地の管理を目的に組織されたグループだそうです。農地解放時には田畑として使用していた村人に土地を分け与えましたが、それ以外の山や宅地は残り、現在でもそれらの土地を氏子が管理しています。

また、上戸口には七つのお堂がありそれぞれに神様がお祭りしてあったそうです。現在では刀那神社に合祀されているということです。

坂下は昔 80 戸ほどあり正源寺はとても古いお寺で現在 26 代目だそうです。上戸口には他に、小坂出と向出があり、それぞれ光蓮寺、善照寺の 2 ヶ寺がありますがいずれも 16 代目だそうです。そこから判断できるのは、坂下が上戸口で一番古い集落だということです。



○刀那神社 史実＋伝説 上戸口町

「式内社」刀那神社 祭神「建御雷之男(たけみかづちのおの)命(みこ)」「伊弉諾命」

刀那神社の歴史は古く、伝承によれば今から 1500 年余り前、継体天皇がまだ男大迹王の頃、王は味真野に住まわれていた。王は味真野の守りとして、刀那坂の峠に木戸を設け、神社を建立して守護神として「建御雷之男命」を祭ったのが刀那神社の開基ともいわれています。

町名の戸の口は刀那神社の口にあるので刀那口村が転訛して戸の口になったとも、又木戸の口にあったので木戸の口が戸の口になったとも伝えられています。

往古から多くの社殿が並んで荘厳な大社であったが、延元年中三峯にこもった平泉寺衆徒の兵火にかかって社殿が全焼したという。今なお社の礎石があって往古は大社であったことをしのばせている。

天正の頃(1573～1592)兵火で焼き払われ参拝にも不便とのことで現在の地に遷座した。明治 41 年(1907)に水谷山の白山神社(祭神伊弉諾命)と三峰、白山神社の2社を合祀その他のお堂(薬師堂、地藏堂)も合祀して境内社として崇敬の念を守っている。

当社には聖観音菩薩・御正体、社叢には市内最大の大杉など市指定の文化財が有り上戸口の多様で波乱に富む歴史と文化そしてロマンを今に伝えている。

刀那神社の創設時は不明ですが古くから戸口地籍の刀那坂というところに鎮座してあったそうです。社は多くの社殿瓦が並んでいて、延元2年(1337 年)南朝方が三峯城にこもった頃は、大社であったそうで、今なお礎石が山中に残っているそうです。

※祭神 「建御雷之男命」雷神・武神・軍神 ※命・尊は神の敬称
建御雷之男命は伊弉諾命の子供で、大国主命と談判して出雲の国を譲り受けたり、諏訪神社の神と力比べをして一捻りにして国譲りがなったともいわれ、又相撲の起源とされています。鹿島神宮(茨城県鹿島市)の主神として祀られていることから「鹿島神」とも呼ばれている。全国の鹿島神

社、春日大社で祀られています。

○祭神 伊弉諾命(伊邪那岐)は伊弉美と共にアマテラスの神をはじめ八百万の神を生み国産み神産みと呼ばれている。「天照大神」は(古来より女神とされている)伊勢神宮の主神で皇室の祖神の一柱とされる天照の中心とされ天照御大神とも日神とも呼ばれている。神明神社(鯖江市神明一丁目)が主神としているほか全国に祭られている。



○こぬか虫送り 伝説 上戸口町

上戸口町の奥谷の中腹に、小さな平地があり、そこは刀那神社の跡と言い伝えられています。この平地に毎年 8 月 7 日の夕方、男の子たちが松明(たいまつ)を持って集まりました。たいまつのはき方は、竹や細い雑木の枝などを、長さ 1m 程に切って、それを直径 10cm くらいの束にして、数箇所を縛り、先に燃え易い杉葉などを付けたそうです。

日が沈んで暗くなり始める頃、子どもたちは、たいまつに火をつけて急な山道を下り、畷に出ると「かりかりほ。かりかりほ」と大声で呼びながら、たいまつを 8 の字に振り回したそうです。

夏の夜空のもと青田の中を何十ものたいまつのはきが続いて行くのは、まことに美しく、村の大人たちも家から出て来て見物したと言います。村はずれまで行くと、たいまつを血の川に捨てて我が家に帰り、病虫害の駆除を行ったと言い伝えられています。

鯖江市史第 1 巻民俗編より



鯖江市筋生田町「虫おくり」

○獅子岩 伝説 磯部町

磯部の北方、鳥立山（磯部の人たちは北山と呼んでいる）の西中腹に、獅子岩と呼ばれている大きな岩があります。獅子が四つ足を折って座っているように見え、頭から尾までが二メートルあまり、頭と顎のあたりには苔が生え、大きな口をあけて、今にも飛びかかりそうな恐ろしい恰好をしているので、いつのころからか誰がいうともなく獅子岩と呼ばれて来ています。

この岩は、昔は大きく口をあけていましたが、この口も今はしっかり閉じてしまっていると伝えられています。現在は険しい崖や樹木が茂っていて訪れる人も少なくなっています。

天正 3 年（1575 年）織田信長が越前の一向一揆を鎮静化するため寺々を攻めたとき、落井の正立寺も例外ではありませんでした。正立寺を開基した兼隆は身の危険を感じて、磯部のこの山中にのがれ、獅子岩の影に隠れておられました。落井の門徒の者たちは、ひそかにお守り続け、冬の雪の日には草鞋（わらじ）をさかさまにはいてまで秘かにこの山中に食事を運んだと言われています。しかし信長勢の詮議が厳しくなり、もはや逃れる術もなくなったと観念した住職は、この岩の下に親鸞聖人の御真影を埋蔵し、自害して相果てられたと伝えられています。その後戦乱が静まった後、正立寺の後継ぎ乗心が再び寺に安置されたと伝えられています。それから後も落井の心ある人たちは、毎年この獅子岩に詣でて香華をたむけ吊い続けておられたそうです。

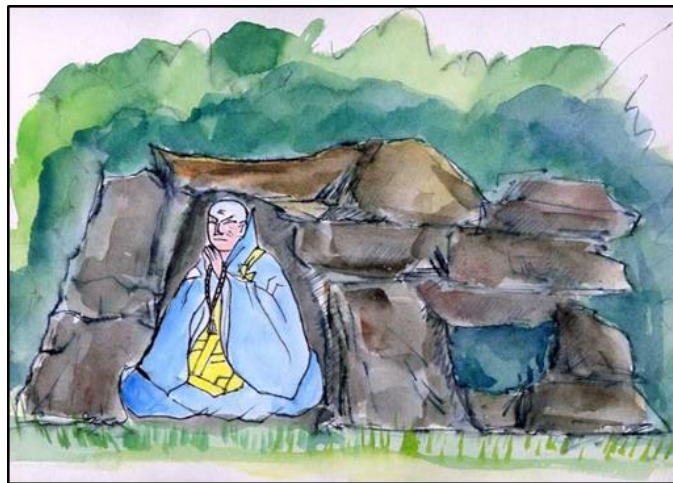
鯖江市史第 1 巻、ふるさと北中山等より

他の説

「福井県の伝説」によると、信長の攻略にあい住職は磯部の北山に逃げたが、もともと身体の弱いお坊さんのことだから、険しい坂道を登るのは大変なことで、ちょうど獅子岩のあたりに来た時、もう一歩も進めなくてお坊さんはそこに倒れた。倒れながらもどこか隠れる場所がないかと付近を見廻すと目の前に大きな岩があり、その岩の下に人間一人が入れるくらいの穴があった。これを見た住職は仏様のご加護によるものと、その穴の中に身を隠していたそうです。一方追いかけてきた信長勢は、山中を探し回って獅子岩

の下まで来て見上げると、大きな獅子が上から眼光鋭くにらみつけ今にも飛びかかりそうなので、驚きかえって山から転がり落ち、道を変えて北の方に追っかけていってしまった。住職は獅子岩のおかげで、危うく命が助かって元のお寺に帰ることが出来たと伝えられています。

福井県の伝説より



○ 赤橋の今昔 伝説 磯部町

磯部の古老たちが「赤橋」と呼んでいる場所があります。通称「中道」を通り、片上用水を渡るために昭和の初め頃まで、一枚岩の赤い石の橋が架かっていましたが、その辺りを赤橋と呼んでいるのです。この赤橋なる赤い岩、今は弁財天の頂上にある忠魂碑の隣に静かに鎮座しています。

この赤い岩は古来から弁柄(べんがら)の原石として使われていた重宝な岩でした。弁柄は、古くは土器の彩色にも使われ、磁器の絵付け、漆器や建造物の塗装など等、様々に使われて来ました。「金針売ろうか、朱を売ろうか」との言い伝えがあるように、かつては、嵩が小さくて高価なものの代表である、朱の顔料弁柄の原石です。

この貴重な赤い岩は、磯部の山王山中腹に七堂伽藍(しちどうがらん)を備え、大きな勢力をもっていたという山王神社の拝石であつたらしいのです。その大きさ、その形や姿から、そのように伝えられています。

拝殿の前におかれたこの大きな岩の上に、氏子たちは正座し、さまざまな祈りを行っていたのでしょう。それが、いつの頃からか、赤橋と呼ばれる片上用水に架かる橋として、住民を守っていた時もありましたし、現在は弁財天頂上の忠霊塔横に赤い歌碑として静かに磯部を見守っています。時の流れの中で、生きる赤い岩には「やすらかに、ねむれとそおもふ、君のため、いのちささげし、ますらをのとも」皇后御歌(昭和17年建設磯部区、謹書、金柏寿石、山本初五郎刻)と刻まれています。

磯部の古老からの聞き取り、ふるさと北中山より



○れいぞうこ 史実 磯部町

磯部の入り口、弁財天のふもとに「れいぞうこ」と言い伝えられている場所があります。

明治のころ、磯部では養蚕(ようさん)に携わる家が多くありました。この養蚕の蚕種紙、繭(まゆ)の保管の為に工夫された雪室のあったところです。

古老の記憶によると「れいぞうこ」とは、縦横10m、深さ10mの穴を掘り、その中に3m×6mの平屋の小屋を建て、その中に棚を作り蚕種紙、繭を保管していたそうです。屋根はスレート葺きにし、木組みをして藁で葺き、その横に人の出入り用の瓦葺の建物があったそうです。

養蚕業(ようさんぎょう)は弥生時代に中国大陸から伝わったとされています。全国の農村に普及したのは近世以降のことです。

野生の「やまめ」又は「クワコ」という虫が桑の葉の裏側に繭を作ると言うことは良く知られていました。そこで最初は山に桑の木を植えて放し飼いをしたところ、鳥害があるのでいろいろ改良されて家の中で飼育されるようになったと言われています。

明治の頃には養蚕(ようさん)技術も進み、どこの農家でも盛んに飼育していました。繭(まゆ)一貫目(いっかんめ 3.75kg)が米一俵(60kg)に匹敵する値段であるというので、どこの家でも力を入れました。蚕の数え方は家畜と同じように一頭、二頭と数えます。

蚕(かいこ)には糸蚕(いとかいこ)と蚕種(かいこだね)があり、糸蚕は飼育が容易で各地で多く飼育し磯部町でも殆どの農家が飼育していました。蚕種は飼育がむずかしい事もあり、磯部では5軒の農家が携わり、個々が埼玉県、山梨県、長野県、その他の養蚕家(ようさんか)に販売していたそうです。

その他の福井県内での蚕種飼育家は、大野郡で一軒、片上大野で一軒、河和田で二軒あったそうです。

蚕は変温動物なので気温の変化によって発育経過は変わるという特性があります。蚕種、蛹は0℃～5℃の中では休眠状態に入り発育しません。10℃以上になると発育をはじめます。蛹は温度が上がると液体酵素を出して繭の中から自ら出てきます。この特性を利用して「れいぞうこ」で生産

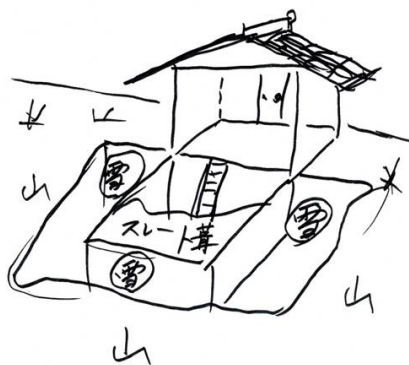
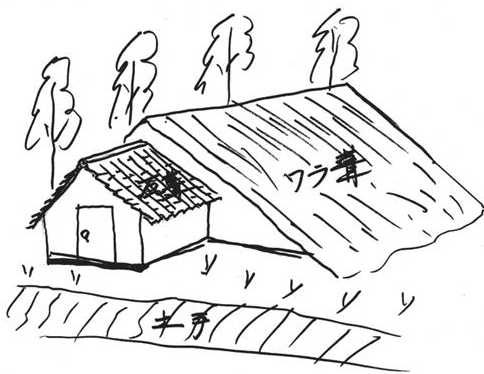
調整するわけです。

農家の蚕期は春蚕、初秋、晩秋とありますが、福井県の養蚕は5月～9月、桑の葉がある時期に合わせて、蚕種を配布するため産卵から2日後に低温5℃で眠らせます。その後必要に応じて卵を希塩酸に浸して処理をし目覚めさせます。蚕種飼育家にとっては冷蔵施設は生産調整の為に不可欠だったのです。蚕は約1.3mm程の大きさに平らな楕円形の卵を約3日間で産卵し、産卵紙に卵を産みつけていない場所を産卵管で探りながら卵が重ならないよう1つひとつ産みます。一腹で約500個から700個産卵します。

昭和16年日本蚕種製造(株)が出来、福井県支部は磯部に設置し、福井市町屋町にあった蚕種試験所の指導を受けて蚕種は国に納めたそうですが、終戦と同時に解散となりました。

昭和20年頃終戦前後のどん底の生活の中で「れいぞうこ」に貯えられた雪は熱が出た時に頭を冷やしたり、魚の保存に使ったりする人もあり生活になくはならないものでした。しかし時代の波に逆らえず、昭和22年やむなく「れいぞうこ」は取り壊されてしまいました。

養蚕は鯖江市史第1巻民族編より、「れいぞうこ」は磯部の古老より聞き取り



○磯部のため池 史実 磯部町

磯部の北山のふもとに北中山地区でただ一つのため池があります。このため池は約二百年ほど昔、村人たちの血を絞るような願いの中で造られたのです。

米作りに生活のすべてがかかっていた百姓にとって一番の問題は水です。昔は日照りが続けば「雨乞い」をして神に祈り、待ちわびていた雨が降れば「雨喜び」に村中が仕事の手を休めて神に感謝し喜び合ったものです。

そんな磯部に水野長兵衛(明治12年今立郡磯部村村宅番号の書かれた文書に戸主として記載あり)という老人がおられました。大正のころです。日照りが続くと言って嘆き、雨が続くと言ってこぼす村人たちに、彼は天を仰いで言ったのです。「めったなことはござんせん、天は人を殺さず。一日一日近づきます(日照りの時は一日一日雨が近づくといい、雨の時は一日一日晴れの日が近づくという意)」と言って村人の心を支えたと伝えられています。

磯部の北山のふもとに現在も水をたたえ、貴重な非常用水ともなっているため池は享和2年(1802年)に築造されたと伝えられています。「磯部は旱水損の田畑にして夏季に至れば僅少の旱にても谷川の水止まり・・・」と古文書にあるように、磯部の人々は用水、排水に苦しみぬいて来ました。

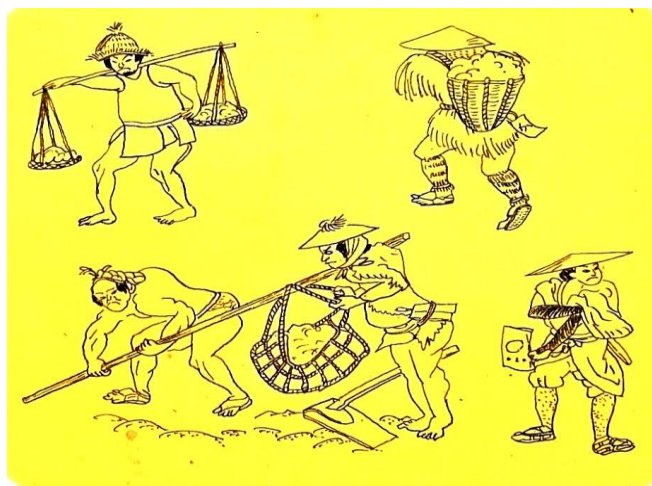
今から約2百年あまり昔、時の村代表たちが幾度となく福井の御役所へ願い出て、近隣各地より人足加勢、約12,700余名の助けを得、北中山地区ではただ一つの灌漑用ため池が設置されました。藩政のころ、領主の命とあればどんなことも従わざるを得なかったとはいえ、交通不便な遠くからはるばると歩いて応援に来てくれた人たちの苦労は大変なことであったと思われます。

しかし、念願のため池は出来ても、排水の便が悪く、その後も、文政2年の大洪水をはじめ、毎年のように水に苦しめられ続けました。村人の代表は、ことあるごとに平身低頭して、福井藩水理奉行所へ願い出続けた記録が残っています。

なかでも時の村役人、田中孫兵衛、南部七太夫、山崎善右衛門の三氏が「我等が首落つるとも決して悔ひず」と決死の嘆願をした記録も残っています。磯部の用水、排水には隣の落井、下戸口とのつながりもあり、なお幾度遷して今に至っているのです。

戦後は子どもたちの水遊びの場所になっていたため池、今も底ざらえを年中行事として行いながら村人たちはため池を守り続けています。

ふるさと北中山、田中家所蔵「報徳記」より



江戸時代の土木作業の様子
（「印旛沼開墾保定記」より作成）

○お山王さん 史実 磯部町

わが磯部の村はいつごろ生まれたのか知るべくありませんが、千年以上の歩みを生き続けてきたものと想像できます。その村人たちの心の結び目、鎮守の氏神様は現在石部神社ですが、その境内に他に二社あります。本殿に向かって右側に山王神社、左側に八幡神社であります。明治9年、この石部神社とともに、ここに遷宮されたと記録が残っています。その一社山王神社がここに移される前は、山王山中腹、現在の磯部の田を潤す大きな貯水槽のあたり、もっと昔は、伊藤養鶏場の鶏舎があったその少し上あたりの平らな所にあったと伝えられています。この神社の境内は広く社殿も宏壮、うっそうとした森林に囲まれ、七堂伽藍を備えた大きな勢力を誇る神社であったといわれています。この山王神社の勢力を語るその証として、一の鳥居は約一キロ南方(現在の北中山小学校校庭の東南端あたり)にあり、その礎石があると言い伝えられていました。今その辺りは「馬正免、馬正面」として字名が今に残っているのも、これを語っているように思えます。

この社は天正の乱で兵火にかかり焼け落ち、また多くの社領がありましたが、朝倉氏の没落とともに没収され、元の社の復活は出来なかったそうですが、現在でも磯部の人たちはこの地を「お山王さん」と敬称を付けて呼び続けています。

ふるさと北中山、磯部故事録等より

明治9年弁財天山中腹にあった八幡神社とともに石部神社の境内に移された記録があります。「馬正免、馬正面」は中世荘園の騎上検注使立ち入りを免除されていた耕地を「馬正免、ばじょうめん、ばしょうめ」と言われ、神田や寺田などに多いと聞きます。



○石部神社の算額 史実 磯部町

江戸時代に発達した日本独自の数学を「和算」といいます。学問に志を持った人は著名な学者のもとへ弟子入りし、数学に励み、地方に戻って塾を開き、子弟を教育したといわれています。

ここ磯部村にその時代に金柏久美・保美という父子の数学者がおられ、福井や鯖江の算学塾で学び今立郡地方で和算を指導していたと伝えられています。

このころの数学者たちは数学の問題が解けたことを神や仏に感謝し、益々勉学に励むことを願って「算額」として神社に奉納する風習があったそうです。この算額奉納の風習は世界でも類を見ない日本独特の文化といわれています。

地元石部神社にも有名な算額が奉納されています。大きさは縦 37cm 横 119cm 福井県では数少ない絵付きの算額で、絵も美しく、保存状態もとても良いものです。銘により、この算額は明治 10 年 5 月、和算を学んでいた磯部村境口惣助が奉納したといわれています。

この算額に書かれているのは2問です。連立方程式に関するもので、比較的易しい問題といわれています。ここにその銘文の一問を記してみます。一度解いてみてください。

○原文 今神社酒貳石氏子者被下男女共三百七人男女三人少

又男女 3 合少一人當何程問

答曰 男一人八合

術曰総数之内三八減割女数は三合相乗酒貳石

加入総人数以除是男一人八合當知



○読み下し文 今神社より酒貳石を氏子の者へくださる。男女共にして三百七人なり、男より女は三人少なし また男より女は三合少なうして 一人當り何程と問う 答えていわく 男一人八合なり、すべていわく 総数の内より三人を減じ割れば女の数なり是に三合を相乗じて酒貳石に、加入し総人数を以って是を除く男一人に八合當りを知る。

さばえ文化財、文化課前田参事解説より

○報徳記(六曲一双屏風)田中家所蔵 明治34年制作

米作りに生活が懸かっていた百姓にとって、一番の問題は水であった。水との戦いの歴史はどの村にもあったが、磯部も例外ではない。周囲の山が浅く、河和田川、血の川は毎年のように氾濫する。山からの水、川からの水など、自然に任せたままの田んぼづくり、畑づくりの苦しみの中から用水(水をためる川の流れを変える、堤防の補強をする、排水路を作るなど)様々に考え、工夫して水と立ち向かってきている。どんなことをするにも、すべて福井藩松平家に願い出、隣村との関係も考慮、約定書を交わし、人力でおこなう工事であった。

記録を拾うと享和二年(1802)ため池が作られた。しかしため池はできたがあまり効は少なかったようである。血の川、河和田川の氾濫が頻繁にあり、排水の便悪く、稲田は一夜にして泥海と化し収穫全滅、半減が続いていた。文政二年(1819)、文政六年(1824)大洪水の記録も残っている。

磯部村長百姓、庄屋は村人の困窮を目の当たりにし、年貢の延滞、排水悪水吐工事の訴状を出し続けている。が、文久元年(1861)「再三再四福井藩水理奉行所へ排水工事の設置方を懇願せしも許容なかりき……」という文書も残されている。

慶応二年(1866)わずかの雨でも白海となり、年々の氾濫により川底が上がり益々作物に被害が及んでいると実態を訴え、更に具体的に落井地掛りのところへの排水路計画までも記した嘆願書も残されている。

明治三年(1870)ようやく藩を動かし、排水路開通場所の予定地を徳山奉行実地検分、続いて落井村との約定書が交わされたこと。村人が力を合わせ、事を起こし、日ならずして竣工した。この一連の事柄を後の世に伝えようと書かれたのが「報徳記」(原文および書下し文は別紙)である。

画:田中南翠(第五代北中山村長 生涯絵筆に親しみ、作品多数残っている。特に人物描写に秀でていた)

書:石川英(日本書道界の長老西川呉右の師)

磯部の風景、人物など細かく味わっていただけたら

一曲の図 磯部の田が湖や海の如く泥田と化している様

二曲の図 庄屋田中孫兵衛が、吉谷を通りかかり村人の話を聞く場面
三曲の図 長百姓山崎善右衛門 南部七太夫 庄屋田中孫兵衛
が「わが首落ちる・・・」と密談している場面

報徳記(原文訳)

越前国今立郡磯部村は、旧幕府時代福井藩松平家の領地である。その地は河和田谷十ヶ村及び戸ノ口三ヶ村の下流に在る。磯部村所屬の田は二十余町、古くより低地にあって長雨に遭うたびに河水は氾濫し、滔々として逆流し、水路を切って流す望みもなく、殆ど湖や海のようなものである。だから穀物は腐り秋になっても収穫は不可能、冬ともなれば鳧や雁が群れ集まり、徒らに国主等の遊獵の場となるのみである。よってしばしば租を減ずることを願い、或は救米を請うている。だが村民は往々にして飢渴を免れず、大変な窮乏に陥り、その困苦、難渋は到底言い表すことはできない。このような状態は年を重ねることすでに久しい。幸い明治維新の聖代となって磯部村に田中孫兵衛という者あり。天性温厚、幼にして学を好み、為に同村大里正、野村氏とその器、同じ位となる。長ずるに及んでこの困窮を救わんと志す。

或時年賀のため足羽郡末広村大里正宅に至る。途中吉谷の堰を通過したとき、村民二人が排水路の請願の事を話しているのに会い、そこで彼等から詳しく順序方法を問いただし、小躍りして喜びすばやく年賀を了えて帰る。急いで南部七太夫、山崎善右衛門と相談、両氏も大喜び、多年希望してきた排水路を造る時機が来たと思い、ここに於いて三人かたく約束。他に漏れないように審議を尽くし決意を固めそこで国主・松平家役所に請願せんとする。幸いにして当時の役人徳山氏の役所に出向くことを得、詳しく実地検査をしてくれるよう陳述する。

徳山氏は速やかに来て排水路開通の予定地を検閲する。村役人ども集まり策を立て、しかも隣村も説諭してともに約定書を交換する。時、明治二年五月である。そこで村民は力を協せ、工事を起こし、日成らずして竣工する。磯部村民の多年の積もる苦悩は水と共に流れ去り、はじめて沃地良田となすことができた。ここにおいて苗を植え育て養いまた、長雨で水が満ち溢れても、唯水路はいっぱいに広く水を流し滞する所がないのを見、

発起の三名はもちろん、その村の老いも若きも歓喜し手を打って喜び心配な顔を開く(安心する)。これ以来年々数百石を収穫するようになる。実にこのことは百難を凌ぎ千辛を極めるといえども他村に迷惑をかけず、自分の村を救い、多年の荒れ地を転じて富饒の沃土となし、村民を益したこと偉にして大なること名状しがたい。しかし数年の後にはその功績は埋没。そこで後の世の人に発起人の苦難を知らしめんがためここに碑に代えて画工にその苦楽のありさまを描かせ六曲の屏風になし尚自分をしてその由来を記させて合わせて一双となしてこれを贈る。発起者は永く其の子孫に伝え、また後の世の人にこれを見せてこい願がわくば利益・幸福を増進する一助としたいのみである。

明治三十四年歳次辛丑春二月 上坂吉之の求めに応じて之を綴る鴻斎居士 石川 英



「教本」づくりに際して

この冊子は「北中山語り部の会」の内部資料です。北中山まちづくり委員会の活動の一つとして始められました。募集に応じて集まった会員は自分自身が北中山の事を何も知らない…知りたいとの思いを抱いて、話すより聞く為に集まりました。こうした素人の人々が「村誌ふるさと北中山」「三峯の城と村」「市史民俗編」等を拠り所とし、長老から昔話を伺ったり、また資料をお見せいただき史跡や文化財を屋敷内にまでご案内いただく等、地区の多くの方々のご協力をいただきました。

福井市森田公民館や、旧美山町の樺八幡宮等を訪ねての交流、見学を重ねることによって、北中山の歴史のつながりを学ばせていただきました。こうした経験をまとめた「教本」は、素人の思い込みや感情に流れた判断が多々あるかと思いますが、会員はこの「教本」を出発点として、ひるまず移り行く変わりゆく北中山を記録し続けなければなりません「学問は歴史に極まり」との言葉もありますが、私達の身近な先達の言葉（伝承）に、成しとげた事業（文化財）から知恵を学び、人間のすばらしさも又愚かさも学びながら人間の業（正体）を悟りいくばくかでも学習して“平穏で夢と希望に満ちた、笑顔いっぱい“のまちづくりに少しでもお役にたてればと自ら責任の重さを痛感しています。皆さんありがとうございました。そしてこれからもどうぞ宜しくお願いします。

公民館長、職員の皆さんには、素人の遅々として進まぬ作業に気長に懇切に指導、助力もいただきました事、心よりお礼を申し上げますとともに今後とも変わらぬ御指導をお願い申しあげまして「あとがき」とさせていただきます。

平成 30 年 3 月

北中山語り部の会 会長 五十子春一

教本編集委員名簿	
氏 名	住 所
中 林 久 代	鯖江市落井町
渡 辺 末 子	鯖江市落井町
堀 由 紀 子	鯖江市松成町
青 木 み な 子	鯖江市川島町
五十子 春 一	鯖江市川島町
井 波 裕 美	鯖江市川島町
黒 田 重 治	鯖江市川島町
斉 藤 仁 一	鯖江市川島町
斉 藤 宣 子	鯖江市川島町
山 内 進	鯖江市川島町
小 林 康 子	鯖江市戸口町
平 岡 栄 子	鯖江市戸口町
奥 村 巖	鯖江市中戸口町
玉 村 憲 治	鯖江市中戸口町
浅 野 弥 生	鯖江市上戸口町
森 本 茂	鯖江市上戸口町
山 田 幸 代	鯖江市上戸口町
大 森 弘 美	鯖江市磯部町
田 中 弘 子	鯖江市磯部町
南 部 由 紀 子	鯖江市磯部町



加多志波神社・三鬼面(国指定)